

いなゝき



6

青山学院大学馬術部

紳士用

◎ ポロシャツ

◎ セーター

◎ 靴 下

## 銀座メリヤス株式会社

取締役社長 内 藤 長 一

東京都中央区銀座6-2

TEL (571) 0010, 0618

・創立大正元年

・乗馬靴の御用命は伝統ある技術の習志野稲毛屋へ

I N A G E B Y A

習志野

# 稲 毛 屋

T O K Y O J A P A N

東京都渋谷区神田2-6-3 TEL (402) 0307



## 目 次

馬のさゝやき

監督紹介Ⅱ私のお敬いⅡ：

関東学生争覇決勝戦に臨んで：

関東学生馬術二・三部争覇戦

新入所感

心の片隅に（新入生を迎えて）

関西遠征転戦記

試合報告

夏季角館合宿報告

女子大室合宿記

北海道遠征の思い出

釣りとわたし

社会に仲間入りして

緑鞍会総会報告

二部馬術部の現状

躍進めざましい高等部馬術部

\* 馬匹紹介\*

彼と私（月雪のこと）

三年間強の間に学んだ事（剣坊の思い出）

お知らせ

編集後記

羽坂 勇司 一

村野 吉昌 二

伊藤 正昭 三

石田 謙三 五

八

巴 公子 二二

佐藤 健 二三

二七

篠原 敬明 三一

中西 紀子 三七

岸 祐子 三九

内藤 長一 四一

鈴木 宏志 四二

大竹 国義 四四

水島 政彦 四六

三谷 稔 四七

四九

那披 広和 五二

五七

渋谷 芳子 六一

六二

## 馬のさゝやき

我々馬は人間の言葉で、どうも悪いことに用いられている。曰ク馬鹿、曰ク馬の足……。我々綱島の仲間六匹も何んとなく皆にバカにされている様な気がしてくやしいので「馬の足」はとも角として「馬鹿」の語源を調べてみた。

秦の始皇帝の二代目胡亥の時、その承相趙高は野望家で帝位を奪うことを企てるに到った。然し実行するには群臣の中から自分に従うものと、胡亥に従うものを見分けておかねばならぬ。そこで趙高は奇想天外な一策を案出した。

ある日胡亥に一頭の鹿を献じたのである。胡亥は素直に悦んで「おゝ、いい鹿だな」と云った。そこをすかさず趙高は「これはしたり、馬ではございませんか」と云う胡亥は笑って「これこれ冗淡もいい加減にするが良い。鹿を馬だなんて、まちがうにもほどがあるぞ」「では朝に居並ぶ誰彼に聞いてどらんなさいませ。陛下こそかまちがえでございます。」

胡亥は、趙高があまり大面目なので、からかい気味に、ごく側近の一人にきいてみた。

「あれは何だ？」

「馬でございませう」

「何んと」胡亥はギョツとしてあわたゞしく次の臣下を指さしてきいた「あれは何んだ？」

「馬でございませう」

次々に指される臣下はほとんど馬と答えた。胡亥は思わず「どうしたのだらう。そんな莫迦な……」今日八力という音素に馬鹿という字をあてるのは、この故事に由来している。(十八史略より)即ち馬がバカなのではなく「欺きて侮蔑したる意とはをれ愚なる意を成さず」(大言海)とあり、今だに人間が馬鹿という言葉を用いているのをフンガイしたり安心したり、バカバカしくなりました。

私達もバカになつたつもりで学院の馬術部のために一歩、一歩前進する様努力をします。

先輩の話をきくと学院の馬術部も譜先輩が四十年以上にわたつてきつた足跡の上に立つて、現役の学生諸君が努力された姿が今現在だと思えます。

諸先輩も学生諸君も我々と手をとりあつて学院の馬術部を発展させようではありませんか。

日頃の土田部長先生、青木先輩の御厚情に感謝しつ

## 監督紹介

# 私のお願

今回のいななき発行に当り、改めて、私が監督に就任いたしましたことをお報らせいたします。私の如きものが、この大役をおおせつかり、はたして出来るかどうか、始めの頃は心配いたしておりました。何分、私が現役の頃の部とはその趣きを少しく異にしておりますが、どこかに昔からの我が部独特の雰囲気を感じ、現役の皆様との間隙が除々に狭められていくのを喜しております。最近富に、自馬主体の掛け声が聞かれます。馬を育て、馬に育てられていく現役の皆様にとつては、試合の毎のあのみじめさ、やるせなさを感じることをく、自分たちの馬で、たとえ現在が未調教のものでも、競技に臨むことは、貸与馬にもまして、一層有意義であり又直接身を感じることも多かろうと思えます。しかしこのために、万が一に

も、貸与馬戦に見られた、一種の緊張感から生まれる規律というものが破られないように、願ひする次第です。

私も六月の関東トーナメント戦を連日観戦いたしました。現役の皆様は全員一団となつて、高い障害を通過され、見事、十一月の決勝リーグに残ることが出来ました。このファイトと団結でこれからの部を、続けて前進させていただきたいものです。

私も忙しい身ですので、何かと現役の皆様との接触も教少なくりますが、出来る限り皆様と話し合う機会を持ちたいと思っております。又他の諸先輩方の皆様にも、今迄以上の御援助を、現役部員共々願ひして、筆を置きたいと思ひます。

村野 吉昌

# 関東学生争覇決勝戦に臨んで

伊藤正昭



二部三部トーナメントに於て、二部決勝戦に残り、十一月二十八日、十二月一日の二部決勝、一部トーナメントの出場権を得ました事は諸先輩、及び監督、コーチの御協力のたまものと思ひ部員一同を代表致しまして、厚く御礼申し上げます。

さてこれから二部決勝一部トーナメントに向ひ部のこれからの抱負をお伝えいたしたいと思ひます。がその前に二部三部トーナメントにのぞみ吾々が綱島に合宿中御多忙にもかかわらず村野監督が、ともすればだらけ気味になる吾々部員を励まし、チームワークの重要性等を懇々と説明され、部員一同一致団結して試合にのぞみ、この様な好成績を収められたのも、監督のお蔭だと思ひ部員一同感謝致している次第です。これらの事を考えると先輩の励ましが非常に部全体の士気を高めるといふ事を痛切に感じると共に、これからも前よりまして、諸先輩の来部を期待し、吾々部員を御指導下さる様お願い申し上げます。

さてこれからの百四〇日会りの日数に於て、一般自

馬競技、オープン戦、定期戦、女子の試合と今年中に予定されている試合数は、決定しているのだけでも十二回、何分これだけの試合数があれば、その都度強化練習等を取り、技術の向上等を計っておる次第でございます。お蔭様で九月現在の成績もまずまずというところで、しかもオープン戦には下級生だけで、試合をやらせて試合根性というものをつけさせ、いざトーナメントの時、レギュラーに欠員が生じた場合には、すぐにも使える様にと心構えておる次第です。

最近では（九月現在）六月のトーナメント前から比べて、部員一同目に見えて、技術向上し、精神面もしつかりして来て、このままの進歩の仕方では十一月のトーナメントに当たれば、決して一部優勝も夢ではないかと思えます。

何んといつても貸与馬競技に於ては、個人個人の技術上よりむしろチームの団結心及び必ず勝つんだという

気持が大切だと思ひ、それと同時に試合に出る者だけ一生懸命やってくれるから俺は黙って見ていれればいい

だろうなどという考え方の部員が一人も居なくなり、むしろお前は俺の代りに出ているのだから、俺の分までガンバッテ来てくれよ、という考え方が部全体に浸みわたってくれば、もし試合に敗れても、部全体が協力しかつ試合に勝つことよりもはるかに有意義だと思ひます。十一月のトーナメントに於ては、部員一同男子、女子を含めて四〇数名が勝敗にかかわらずに真に充実し後で悔いる事のない気持を持って二部決勝、一部トーナメントに向いたいと思ひ、それを部の抱負といたしたいと思います。

# 関東学生馬術二・三部争覇戦

石田謙三

部の最大目標であり、我々の努力が客観的に評価される関東学生馬術争覇戦が、六月十三日から四日間に渡って行なわれました。以下はその技術的批評、及び反省であります。浅学な私が、このような事について云々するのは、大変借越ではありますが、編集係の御要望なので、あえて筆を取った次第です。諸先輩の御批判をお願いする所以であります。

我々は、四月の新人戦が終ると、すぐにこの日の為の練習を始めました。桜が咲いて、やがて散って行き、五月になるとほとんどの週を強化練習に切りかえ、懸命の努力を続けました。六月早々から合宿に入り、これを争覇戦の最終日まで続行し、今年こそは一部昇格の夢を実現するべく万全の策を取りました。

## 第一戦 対日本獣医学産大

一番篠原は、新人戦で凝乗した東扇で入場。スタート前で降着され我々をハラハラさせたが、どうやらスタートし、遇角で反抗、第六、第八障碍拒否でゴールした。満点馬であるが、緊張しすぎた為に畏縮してしまい、馬の推進意欲を止める結果になった。もつと自由な気持で試合にのぞむよう。相手は一落であった。

難馬姫天竜に騎乗した石田は、スムーズにスタートしたが第一で拒否、再行してこれを通過。続く第二で二拒否、一反抗、第三で二拒否失権に終った。難馬中の難馬であるが、第一通過后、拍車を入れなければ第二も飛越可能であったろう。馬の性格の掌握が先決である。相手はスタート前失権であった。

斉藤は麻好で出場したが、第一で二拒否、反抗の後

トーナメント

第一戦 対日獣戦

本学		日獣大		
減点	選手名	馬名	選手名	減点
13	篠原	東扇	小森	5
168	石田	姫天竜	瀬川	210
168	斉藤	麻好		144
0	佐藤	東荒		6
0	山田	八重桜		15.25
-22	伊藤	城雪	平野	148

本学-571 日獣大 - 524.25

153.25の差で青学の勝

第二戦 対立教大

本学		立教大		
減点	選手名	馬名	選手名	減点
4	本目	飛鳳		0
10	佐藤	白亜		7
123	斉藤	明桜		89
0	石田	白慧		0
0	伊藤	津富		135

本学 - 166.25 立教大 - 249.5

その差85.25で青学の勝

第二を一拒否で通過、第三で二拒否失権であった。難馬であるが、第二を飛越出来ながら、第一障碍を残したのは、技術以前の何かが無かったのではないかと、相手は第四で二拒否で失権。

佐藤は満点馬東荒に騎乗。無過失で通過して来たが、

推進が足らずハラハラさせた。モンテイングを忠実に履行したのであるが、拒否の危険があった。相手は二落でゴール。八重桜騎乗の山田は、満点でゴール。前段の相手は三拒否でゴール。よくおさえて乗っていたが、随伴の時立上る癖がある。あれでは高い障碍になるとおくれる原因にもなる。

何回となく乗って城雪の癖をのみこんでいる伊藤は、第四、第六で一拒否。第七を残して第八で一逃避の後ゴール、前段の第四での二拒否失権を大きく食った。この結果、差は大きく開き、我々一同は勝利感を味わいながら、合宿所へ戻った。

## 第二戦 対立教大学

早朝、軽く騎乗した後我々は馬事公苑に向つた。今日の相手は三部から昇つて来た立教である。その實力は定評のある所、さらに上昇期にあるその意気や、さまざまいいものであろう。しかし、ここで勝てば秋の決勝リーグに残る事が出来る。我々の意気も又、劣らないものがあつた。

飛鳳に騎乗した本日は、第四から第五への回転で肩を出され、ここで反抗を取られてゴールした。相手の満点に対して、誘導の粗雑さという外はない。又膠着された時上体が前傾したままであつた。これでは馬になめられてしまう。

佐藤は老馬白亜に騎乗、第七のウサギで第一を飛越の際、随伴がおくれ、拒否。再行でもこれをくり返し、ゴールした。相手も同様であつたが、再行で飛越して若干食われた。随伴の際の佐藤はしばしば落馬しそうになる。本人に研究の余地があるのではないか。

斉藤は明桜に騎乗して早くも第一で拒否、第二で反抗され第四で二拒否を受けた。たちなおつて第七まで来たが、このウサギで二拒否失権。大きく食われた。体を起こさなければならぬ事は判つて居ながら、背

骨を丸くして乗つていた。

白慧に騎乗の石田は、無過失で帰つたが、最終障碍飛越の際鎧が外れ、一瞬ぐらついた。満点馬であるから、もつときれいに乗るべきであるし何方誘導をしていた。相手も同様満点で通過。

山田は前日と同じ八重桜に騎乗。満点でゴール相手を食つたが、もう少しおさえて来るべきであつた。又、飛越の際のおがみ姿勢は、連続障碍に不利である。

難馬津富に騎乗の伊藤壯、第四で二拒否の後、第七のウサギ障碍で拒否。この際、後退、鞭、拍車と徹底的に懲戒を加え、再行してこの難門を突破してゴールした。第六で二拒否失権の相手を大きく食つた。

結局この試合八三点の差を持つて我々の勝利となつた。従つて秋の決勝リーグ進出が決定した訳であるが、第二試合の相手校立大も一勝一敗で決勝リーグ進出が決まつた。他に東大と成城大が進出する事になり、秋のリーグは四校リーグとなる。その優勝校が一部、二部人換戦に出場資格を得るのである。

# 新人所感

## 一 嚙りかけた道草だもの一

教育学科一年 高松孝子

馬術部に入部したことは私の大学生活を初めの計画からはずすかにかき離れたものにしてしまった。

たまたま馬を好ましく思っていたときに、大学から渡された学生手帳をパリりとめくってみたら、そこに馬術部の名があつた。

たつたそれだけのことが私を入部に誘つたと言つても良いと思う。

そして、そんな軽い動機で始められたクラブ生活、

それは、私にとって大学生活のほんの一端にすぎぬはずのものであつた。

まさかそれが私個人の生活に率先しようとは思つてもみなかつた。

当に、「庇を貸して母屋を取られた」。の感ありである。

時には部員であることはハツキリ意識しているが、学生であることはケロリと忘れていたこともある。

いけない！ と思う。

胸に一物、なきにしも非ずの私はどうやら大変な道草を食っているのかも知れない。

そんな迷いが家人にも通じるのだろうか、しきりと退部を勤めてくれる。

そんな時、踏まれた、蹴られた。果ては噛まれたと言つて、胸にはなやかな傷を作つてみたりすれば、家



人の杭撃を受けるまでもなく自ら頭を抱え込んでしまつたとしても当然のことだろう。

だが一体に道草というものは、面白いもので、仲々やめられをいように出来ているのが普通。どうやら私の馬術も例外ではないようだ。そこへ持つて来て近頃のように、多少欲と思しきものさえ出てくるに至つては、これは「道草」の位には甘んじていられそうにもない。

それならそれでというふうにも考える。

どうせ囓りかけた道草だ、今さら後戻りもしたくない。少々回り道にはなつても、この草の続くところまで辿り続けて行つて見よう。それから本道に出ても行き着く先に変りはない。等と。甘い甘い、と言われるかも知れない。だが私はつぶやいてみる。まだかすかに残つている傷跡の痛みに言い簡かせるように。

「やつてもやらなくても同じのなら、やつてみるのがお前さのん信条じゃなかつたかね。」と

## いつの日か

経済科 松田 撰子

「人馬一体鞍上に人なし」と言われるが如く第一障碍を馬がとんだ瞬間、思わず緊張の身震いをしました。選手の真剣を眼差しと風のように駆けて行く馬の後を見て、底知れない勇氣と嬉しさがこみ上げてくるのでした。これは人部して初めての試合を見学した時のことです。その時ほど「自分は馬術部員なんだ」ということを自覚し、又誇らしげに思ったことはありません。まだ暗いうちに起きて、御飯も食わずにあたふたと出て行く。このことは私にとつては、さすがに苦しいことです。でも時々、駅に行く途中の道で牛乳配達の人と会う時、いつも考えるのです。朝早くから大変だろうな、あの子にとつては生きるが上のことだろうが、私は自分を規律正しく養つてくれるクラブの為なんだ。もう少し頑張らなくちゃ」と。今日も私の騎乗日誌には「初めての障害、必死の思い」と書き記されてゆく。何時のことかこの日誌にも「初めての試合出場」と書

く日がやってくるであろう。その日まで石ころと間違えて馬のポ口を摘んでも掘り潰すくらいは勇氣と技術を身につけたいと思います。でもいつでもポ口の山を見てうんざりとするのです。

## 馬と友達に

経済科 加藤 三知夫

馬術部に入つて四ヶ月、喜びあり悲しみあり苦しきあり草刈りあり完全に馬術部の一員となつてしまつた。馬術というあの貴族的な優雅なそしてスマートなあの印象はいつたどこに消えてしまつた事であろう。現在のこの貧弱なスタイルそして寝わら作美草刈りだけがこの百姓仕事を想像できよう。もうこの体には馬のほいがしみこんでしまつた。しかし考えてみれば生き物を相手に馬を相手にそしてそれを育ててゆけるとは、何と尊い立派なスポーツであろう。馬の技術はともかく馬が自分の愛する、もう一人の自分となつてしまつた時どうして僕は馬術部に入つたのを後悔しえよう。大学の体育会というものは自分の想像していたよりも

若しかつた。部生活における団体生活のむづかしさ苦しき、そんな時自分は馬という絶好の話し相手が必要とするのだ。馬は口をきけない。だが馬に話しかけている時、自分は心のやすらぎを得、この上もないよき友達となつてくれるのだ。さあ明日からの苦しき楽しみも楽しみもおまえと二人でわかちあつてゆこう。

## 巻き乗り

経済一〇 秋 元 カツ子

馬に乗るといふ事が、どんなにスバラシイ事であるかは、乗つてみた人でなければ絶対分らない。規則的に馬の歩速が心地良いリズムとなり、それにつれて囲りの木や、遠くの丘がフワフワと移動する。初めて馬といふものに手をふれ、またがり、その動きを味つた時、私はどこからともなく込み上げてくる可笑しさに出来ることなら「馬に乗つたのね、乗つてるんだわ」と、誰かれかまわず言つてみたいような気分だつた。ところが、いつ迄もいい気分ではいられなかつた。「巻き乗り」と号令を掛けられ、前後左右を眺めた

結果、円を描くと分ったものの、いくら手綱を引いても我愛馬は首だけ曲げてそのまま真すぐ前進してしまふ。しばし私と「馬」は見つめ合った。首は曲つてるので、私は馬の目も口も鼻もよく見えたのである。馬は「なぜ自分で歩かないで、私の上に乗ってるんです。手綱を引っぱったからって、そうやすやすと、言うことを氣いてなんてやりませんぜ。」とウラメシそうに私を見ていた、と当時の私は解釈したのだが、今思えば、「新米さんの言う事を、そうおめおめと氣いていられませんかい。」と言ったのに違いない。

夏休みも終り、後期に人つた今、新学期の時の緊張も通り過ぎて、朝の五時起きがものすごい難所と感じられて来て自分で、自分を叱つたり貶したりしている状態である。こんな時、上級生に「明日いらつしやいね」などと声をかけられ「はい、行きます」と、又やらなくちゃあと思われてきて、上級生の有難味をかみしめるのだが、はたしてずっと、クラブを続けられるかしらと、不安な思いにとりつかれてもいる私である。

## 自分に鞭打つて

英文科一年 岡 峰 孝 子

馬術部に入るなんて、考えてもみなかったが、大学生活を楽しく送りたいと思っていたし、又高等部時代の友達が入っていて、是非一緒にやろうと誘われ、一人では心細いけれどその友達がいるし、クラブの話聞いて入部してしまいました。しかし話には聞いていたものの、早朝練習は私にとつて相当辛いものです。そして気だけはあつてもつい寝坊をしてしまうのが今迄でした。そのためか今私は鞍数は大変少い方で、技術的には何もわかりません。勿論馬をやっているからには、上手くなり試合にも出たいと思えますが、フオーク等を持つて作業をしたり、皆で協力して、一つのものをつくり出したりするクラブの生活を経験して、ともすると我儘になりがちな私を、成長させて行きたいと思えます。

自分でも、どこまで続けていけるか自信がありませんが、馬術に興味を感じ、又夏期休暇合宿、強化練習

を経て来た今、私は私なりに一生懸命頑張りたいと思います。

## ―怖かった先輩も―

法科一年 木所弘子

いななきの原稿を書くよう依頼され、何を書いてよ  
いのやら及びもつかずこまっつてしまいました。何故な  
ら馬術部に入った動機はただ漠然としたものにすぎを  
かつたからです。高等部の時、馬術同好会というもの  
は知ってはいましたが何も興味を覚えずそのまま卒業  
してしまい、大学に進学して入学式の日、フラフラと  
勧誘されるままノートに名を記してしまいました。こ  
んな気持ちで入部したのと、早朝練習することを知らな  
かった私は、とかくなまげがちでした。又、部屋に行  
つてもずらりと座っている先輩が、やたらに怖いよう  
な気がして廊下から首だけ中に入れ、何の用事もなさ  
ないまま、そっくさと退参してくる始末でした。今の  
図々しさと比べると、可笑しくなりません。しかし  
部の雰囲気には、なかなか馴染めず、いろいろと苦労

(?)をしました。今でも時々それを感じます。それ  
でも数ヶ月経た今、最初苦痛だった早起きも、寝坊を  
するとかえつて変な気がします。そしていくら練習が  
辛くつても手入れなど全部終つて着替えた時、何とも  
いえない満足感と、さわやかさを覚えます。

夏期休暇という第一の障碍を乗り越え、これから秋  
そして厳寒の冬とまだまだ私をクラブ生活から阻むも  
のがありますが、これに敗けず、又先輩から数々のお  
教えを受け大学生活を有意義に送りたいと思います。  
しかしまだ馬のことも他の事も何もわからないのが現  
状です。よろしく御指導ねがいます。

## ―今日も又―

経済科 間明田 勝彦

朝五時四十分、僕は渋谷の東横線への階段を駆け登  
っている。急いで定期を見せて、又走り続ける。もし  
てホームの時計を見上げると、五時四十一分、電車で  
駆け込む、間に合った。

今日も一日が始まったのだ、前に書いたのは、桜木

町行きが発車時刻の五時四十二分に間に合わず為の朝の日課なのだ。そして朝の練習が始まる。二時間の後僕等新入生は、引き馬をしに外へ出て行く、この引き馬は、まだ局匹が決まる前は、乗って引き馬に行く事の出来る馬の終るのを考えて待っていたが、馬匹が決まり、決まった馬に対して他の馬よりも一層愛着が感じられるようになった。他の人も同じだと思うが、何かしなくてはいられなくなってしまう。馬とは何と可愛い動物なのであるうかと考えると同時他、何と利口な動物たのだろうと、思っているうちに数カ月がまたたく間にすぎさつた。

## 馬術部に入部して

教育学科 泉 美千子

馬術部に入部して半年あまり無我無中の内に過ぎてしまいました。私は小学生の時から高原などで馬に乗っている人を見ると矢もたてもいられず、母にせがんで馬子さんに引いてもらって馬に乗ったものでした。でも本格的に馬術をするなど夢にも思いませんでした。

その後青山の中部部に入學しまして、その頃良く大学のグラウンドで馬に乗っている学生の姿を見掛けては「ステキだなあー」と、思っておりまして。その時から大学に入學したら馬術部に入りたいと思っておりまして。それを母に話しますと「まあ、あぶない、冗談ではありませんよ」と笑われたものでした。でも今、小学校時代は夢にも思わず、中等部時代に懂ていた馬術部に入ってみて外部から見るとは余りに掛け離れた内部を見て驚きました。馬肥の掃除、草刈、馬場の手入れ、水蒔。先生が手入れ七分に乗り三分と言っておられました。何だかそれ以上手入れが多い様思われます。一日馬場にいますと、グツタリ疲れてしまい、もう何も出来ません。馬に乗れば乗るで、どなられるし、自分でも何処が良いのかわからないのに、楽しくてしかたがありません。それにクラブの人と人との交流、先輩や同輩との交わりもより一層クラブ生活を楽しい物にしている様に思います。続けたいです。

## 「ポロ」にも慣れて

英文科1年 岸 基子

四月、入学式、正門から図書館まで続く銀杏並木に  
そって、各クラブは新人生争奪戦に華々しい火花を散  
らしていた。丁度その時、あこがれの大学生になって  
少々浮足気味の私に、大きな栗毛の馬と、それに乗っ  
た黒い乗馬服の美しい女性が目に写った、すばらしく  
艶のある、そのきゃしゃな長靴に魅せられて、、、  
私は即座に馬術部員と夜つてしまった。、、、

、、、が、しかし馬術部員となって、はじめて

網島の馬場を訪れた時、私は大きを間違をしたよう  
に思った、丁度じめじめとした雨が降り続いたあとで、  
馬ぼつから漂う臭いが胸について、息をするのもつま  
りような気持であった。それに寝わら作業、汚い臭い  
寝わらを、こともをげに整理してゆく上級生を見て、  
こんな事、私に出来るだろうかと全く心細い思いをし  
たものである。

あれから四カ月、伊東大室高原での、はじめての合

宿を経験した今、そんな私にも、やっと馬術部員とし  
ての自覚がわいてきたようである。今まで考えようと  
もしなかつた馬の気持が、今度の合宿でやっとわかる  
ようになって、時々馬と私との間に、かすかな感情の  
交流がなされるのを感じて、嬉しかった。あんなに、  
いやだったポロの始末にも、スツカリ慣れて、今では、  
「汚い！」などと、めくじら立てて、どなる人には、  
かえって腹がたつてしまう程である。

私が今度の合宿で得た事、それは「馬に乗るため  
には、まず馬の気持をよく理解しをければならない」と  
言うことである。馬をまるで親子のように大切にし、  
自慢する上級生を見て、私も早く馬と仲良くなつて、  
人馬一心となって野山を駆けめぐりたいものだ、心  
躍らせながら考えるのである。

## 天下の一大事

### 「四時起床」に打勝つて

英文科 伊田 純子

私は、何故か馬というものに昔から興味、というよ  
りはむしろ好意をもっていました。それは幼ない頃か

ら冒険や活劇が好きだったためかも知れません。中学の頃から実際に乗ってみたいと思いはじめ、二、三度馬子の引く馬に乗った事がありました。大学に入り、クラブ入部を慎重に考えていた時、馬術部の馬を見ました。どの馬だったか憶えていませんが、馬を一目見て決心がつかしました。馬術部に入ろうと、そして入部しました。

説明をいろいろと聞いた時、練習は毎日やっているというだけで、綱島に六時半集合とは聞きませんでした。朝寝坊で知られている私にとつて四時起床は天下の一大事だったので。もし入部する前に聞いていたならば、馬に乗る事をあきらめていたかも知れずせん。しかし、一度入った以上今さらやめるのもいやです。馬にも十分未練があつたので一大決心をして続ける事にしました。今までなら最も熟睡している四時頃に起き出すなんて、我ながら、いや、自分一人で感心しています。

さて初めて綱島に来た時、一步馬房内に足を踏み入れて、あゝ感激に目はしみる鼻はつーんとする。少なからぬ夢を抱いていた私も今ではずつと現実的になり、一心にシャベルを動かしています。しかし時には、何

の因果でこんな事と 생각합니다。それでも綱島に通っているのは、ただ馬ゆえに夜なかしら、

七頭の馬とたくさんの人間、いろいろな馬いろいろな人間。外見とても恐そうを人が案外優しくて心から安心したり、優しそうを人がその実とても恐くて驚いたり、人間で分らないものです。話を通じる人間が分らなくて、口の聞けない馬のことが理解できるかしらととても心配です。早く馬とも、人間とも親しくなつて、楽しく、良いクラブ生活を過したいと思っております。

たった一言

「どんなもんです！」

教科 八幡 寧子

「しまった!!」これが始めて馬場旺行き異様な臭いを嗅いだ時の感想である。今まで馬とはまるで縁のない生活をしていたので吃驚仰天。何がなんだか分からずポヤーとして気がついてみると馬の上であつた。今考えてみると凡そ常歩には程遠いのだが、当時の常歩

をして「なんて面白いのだろう。」と思った。それから病附きとなり朝四時の起床も今のところ殆ど苦にならずせつせ（？）と行っているのである。家に帰るとあれやこれやと珍らしい馬の話をし最初のうちは樂しげに耳を傾けていたが近頃は實しい大学生活を夢みていた母などは毎日アタフタと人參を持って行く大学生活に失望した様で折角大学に入れたのにまるで馬学校に入れたみたいだなどと冷している始末である。女子の人にとつては共通の悩みであるのが家の人々の反対である。今日も馬？。好い加減にしなさい。えっ！落馬？。危いからやめなさい。小言に必ず入つている言葉「やめなさい二」ましてや 噛まれた、踏まれたなどと生傷をつくつて来ると大変である。夏に入り乾草をつくり出してから私はアレルギー體質なのでホシクサ気触れとやらに罹つてしまった。母は此れ幸いにやめなさいと来なすつた。見兼ねた父は馬でそうなつたんだから本望だろうと口を入れるがさて自分の身体を見てやはりいくら馬とはいえ大きな溜息が出てしまふ。しかしこうなつた以上早く親に一言「どんなもんです！」と言える日が来る様に頑張ろうと思ひます。

## 馬に接して

### 思うこと

法学科 井戸 公近

馬術！それは易しく考えていたが、どうにも大変難しい。勿論このことは世のもの全てに通じることではある。それにしても、馬術の男性的なものには驚いた。一見すると、柔かい感じを受けるのですがなんとなんと。四百キロ以上もある巨体を自分の思うがまゝに動かす。自分の心に少しでも不安があれば馬はそれを感じ取る。自分より何倍もの巨体を自分の思うがまゝにあやつる醍醐味、なんと男性的なことか、障碍飛越などは一見してすぐその迫力を認めることが出来る。けれどこの男性的をものも表面的なものでなく、心に深く、強いものであり、大木の広大にはりめぐらされている根よりも増した心の堅固さであると思ひます。又一面、女性的な柔かいものでもある。愛馬心と一言にいつてしまふが、それは馬の思うこと、欲していることを顔の表情、四百キロの巨体の動作から判断し、馬の氣持になつていたわる心の広さ、これは馬術を志

ざす我々にとつて欠かすことの出来ない、やさしい心であり、そうしたくなる馬への愛着でもあります。

馬と人間の交流、これが馬術というものでありまよう。そして馬と自分と他人との交流が馬術部というものだと思います。何んにしても、馬術というものには一歩足を踏み入れたら最後、もう馬から足を洗うことは出来ないとい僕は考えています。

## 一 四年間

やつてみなくては！

教育学科 山 本 光子

二度と無い学生生活を有意義に過すため、私は運動系のクラブに入ろうと思つていましたが、高等部時代までは運動らしい運動をやつた事のない私は、一体何の部に入ろうかと迷つてしまいました。入学当時、色々なクラブの方達が勧誘して下さいましたが、その中で一際目立ってスカットした姿が気に入り、又動物好きな点も手伝つて、何とはなしに、馬術部に入部してしまいました。こんな訳で早朝の練習がある事も知らずにいたものですから、入部してからあわててしま

ました。又時が経つにつれて、部を続ける事に色々疑問も湧きました。でもそんな事をいくら考えてみても、結局は四年間やつてみなくては何も得る所が無いという事が次第にわかつて来る様な気がするこの頃です。先日、生まれて始めて遠乗りに行きました。今までは、映画等で見た事があるだけで、およそ無縁の、憧れでしたが、。。。不当に素的な気分でした。

これから又色々と苦しい事やつらい事が、沢山ある事でしょうが、出来る限りの努力をしていきたいと思つております。

曙に思うことども

仏文科 豊 田 暉 子

必ずと言つていい位に人は私に馬術部に入った動機を尋ねる。そしてその都度、私はそれに答えるべき適當を言葉を見い出そうと焦り果して自分は何如なる動機をもつて入部を決心したのかと考えるべきしほしの時間を要するのである。事実私は馬術部に入った動機は正直言つてこれといつて持つていなかった。唯、数あるクラブ活動の中に目を通しているうちに、私の

目に止まったのがこの馬術部であった。最初から大なる志を抱いて馬術部に入ったのではなくして唯、そこに馬術部があったからなどと言ったら、先輩諸氏にそのあまりの無責任振りを叱言されるかもしれないが、事実そうなのである。しかしだからと言つて、これから先の部生活をいい加減に過ごそうなどという考えは毛頭ない。馬術部に入るに到つては家族の反対を押し切つて、しかもあまり健康の面において自信のない自分の迷いを追ひ払つてまでも、この部に入った以上、自己に責任を負つて自己の生活に改たなる一線を加えていかねばならぬというのが現在の私の偽わらざる心境であるが、馬場の所在地、綱島に出かけて行つたのは五月初めの頃だつたと思う。日的地向いながら私は一抹の不安を抱かないでもなかつた。馬に対する私の観念は全く無に等しかつたしましてその馬の背に乗るなどということは私の想像の域を遙かに越えていたから。盍々高まる不安と好奇心を覚えつつ馬場に着いた瞬時から、その特異な雰囲気へ私にはそう思えたのだが、と私の目に映るすべてあらゆるものが入部の際の私の決意をぐらつかせたのは確かであつた。實際、馬場にいる限り、馬と接している限り、緊張の連続で

ある。初めて味わう上級生、下級生の対人関係、時として感じる矛盾に内心起る反抗心と疑惑心を押し隠して従う自分。そして練習と手人れが終り馬場を出た時のあの開放感。しかし反面、東京のむさ苦しさの中にある学院に比べるとこの馬場は自然の息吹を私達に存分に生々しく感じさせてくれる。そしてこの息吹が私の緊張感を多少なりともほぐしてくれているかもしれない。馬術というものを臆気ながら分りかけてきた今頃、馬を思いのまに動かすということは容易なことではない。そして部というものに忠実、横極的にしかも自己の感情、反撥、微塵の利己心をも否認して部活動に己を没頭させることも容易なことではないと思う。四時半に目覚まし時計に起され、薄暗い道を歩きながら、私は常に思う。かつて描いた大学生活に於ける自分の計画を犠牲にし、家族の反対を押し切つて、馬上においては下から怒声を受けながら、一体何が目的でこうして馬場に向うのかと。しかしこの判然としない目的物を前に、その過程を進みつつある現在、これから先何らかの満足感を味わつた時、私は馬術部に入った目的を意義を明らかに自分にいい聞かせるでしよう。」

## 時々不安になりますかー

英文科 藤井君栄

高校時代体育関係のクラブには全く無関心の私が、何故馬術部に入ってしまったのかと、今考えると自分でも不思議でなりません。そして初めて綱島の馬場に来た時、情けないような、又、クラブを続けていけるだろうかという気がしました。男子と一緒に、フォーク、スコップを持って、寝ワラ作業をしたり、草刈りをしたり、馬術のイメージとは全く異ったものでした。それがイヤになったり、不安になり、時々、馬場に行く気が全然なくなったりしました。しかし、東京大会、その他の試合をみたり、強化練習、夏期合宿を過した今、一生懸命やるうという意欲が湧いてくるような気がします。四年間続けられたらやってみたいと思います。でも高校が女子だけだったので、男子と一緒に、作業をするということにあまり慣れていないので、時々とまどってしまうこともあります。しかしこれも打ち勝って、頑張ります。

## 馬術部に入って

法科 小野三枝子

馬術部に入って一番おどろいた事は、馬が大変可愛い動物であるという事です。大学に入るまで、馬とは全然無関係でしたし、あまり馬を見た事もありませんでした。よくお友達に、「どうして馬術部に入ったの？」と聞かれます。今では何となく入ってみて馬の可愛いさにおどろき、馬のような大きな動物を可愛いと思う自分把おどろいています。

手入れば、入部したてのころはこわくて思うように近づくずこまってしまうました。今では、すこしはなれたもののまだおそろおそろ近づいています。そのうち馬の気持もわかるようになりたいし、技術の面でも早く一步でも先輩に近づきたいと思っています。



## 最後の学生生活を馬で

経済科 宮島 康 彰

高校時代に運動部に入っていなかったハンディをうめるために大学へ入ったら勉強は非常に大切ではあるが馬術部に入りたいと思っていた。僕は小さい時から馬が好きでしたし、馬に乗れるのは学生時代ぐらいしかないことだろうし又運動部に入って体力と忍耐力を養うために又、馬装して馬に乗った時のすばらしさにあこがれて入部いたしました。

いざ入部して、朝五時に起きて綱島に行くことが最初はどんなにつらかったことか。最初の練習から遅れる有様でした。最初に乗った馬は青扇で乗り方を教えてもらい、乗るには乗ったのですがさでどのようには綱を持ち、どのように動かしてよいのかわからず馬上で途方に暮れました。最初のうちは、青扇を動かすことができず、下では大きな声で「動かせ」「もっと強くけれ」「だめだ」「下馬」「前傾姿勢だ」。

というケースが何度あったことが、馬のことについて

は何も知らないので、やることなす事注意さればなしで、その度に本屋た行って馬術入門という本を開きました。

又隅角を通るたびに「前頓する」、「こぶし」、「つまさき内」、「脚を引け」、「返事が小さい」と同じ事を何回も何回も大きき声を声でどなられ、その度に、なおそうとするのですが、思うように行かず練習の終る度になんと馬術はむずかしいのだろうと痛切に感じました。でもむずかしさの中にも四ヶ月たった今では馬術に愛着をだんだん持つようになってきました。当番で一日中綱島に居て、寝わら作業、馬の手入、草かりを一生懸命した後は、一日中一生懸命仕事したとのう満足感を覚えました。

部の中の雰囲気は明かるく、温たんで居心地が良く馬術部に入って良かったと思っております。部生活が最後の学生時代の楽しい思い出になるよう又、馬術部の発展と向上を目標にして一生懸命やって行きたいと思えます。

## やっつてやるぞ

経済科 石原弘行

オリンピックを来年に控えたスポーツ界において、最近、頓に「根性」というものが問題視されている。「現役選手にはどうしても勝つという気迫に欠けている。」とか、「練習にもきびしさが無い。」等という言葉をよく耳にする。要するに甘やかされ、我がままに育てられてきているということなのだろう。これはスポーツ界ばかりでなくどこでも見られる傾向だと思う。学生についても同じで、これでも学生なのかと思わせるような態度をした者が校内をうろうろしているのをよく見かける。そうした場合確かに「○○精神が欠けていると思う。○○が何であるかよく分からない。規律、礼儀等という道徳的を言葉が入るかも知れない。しかし、体育会にはそういう精神が存在していると思う、又、そうした期待で文化部を止め、馬術部に入部したのである。僕自身馬術部に入る前には何の

目的もけじめもなしに学生々活を過し始めていた。しかし、高校時代、柔道部に籍を置いていた僕には、自分をいじめぬいて自分の精神をきたえてやろうという気持がいつもあった。そして、同じクラスの部員にすすめられたのを機会に入部した訳である。さて、馬術とゆうものは一般に知られていないスポーツの中の一つであると思う。僕も入部の際に、友人から「体が大きすぎる」とか「減量しなければだめだ」とか今思えば笑い事であるが、そう言われて本気に心配した位である。すなわち、一般に馬術とゆうと競馬を思い起す場合が多い。年配の方で「馬に乗ったことがある。」とゆう人は殆んど軍隊で経験してきた人達である。今僕には「やっつてやるぞ」とゆう気が起きている。これを持続して部の為、ひいては自分の為に益に在るような心がけたい。そして馬術というものが普及して、多勢の人に乗馬の楽しさを知ってほしい。

結論から申しましょう、正直云って、私は一年生が

大好きです。新入生女子部員総勢十三人、数だけでも頼もしい一年生。その中には勿論色々な性格の人がいます。こういうタイプ、ああいうタイプ、そしてこんなタイプとなまいきにも自己流に判断して。

たったの二年しか年令差がないのに、張切っている人にはいつまでもそのフアイトを持ち続ける様にと云い、迷っている人には拍車

新入生を抑えて

を入れ、何故

## 新入生の心のかたすみこ

か寂しそうな

人には姉貴ぶ

つた態度でい

たわつてあげ

たい気特にか

られる。とに角、一年生と一緒にいる時私は、この上

なく楽しいと思う。そう思える自分を幸せ者だとさえ

感じている今日此頃。決しておせじでもなければオー

バーに云っているのではない。

寝起を共にした大室での合宿、一年生良くやってく

れたと思います。私は、あの六日間を忘れる事はでき

下級生をこの上なく愛し、ある時は厳しく、そしてある時はまるで自分の妹同様に可愛がり、共に悩み、自らの成長の為に毎日絶え間ない努力をしている。そんな人が私の友人にいます。彼女は二年続けてキャプテンを努め、私の顔を見るととたんに下級生をほめちぎる有様。勿論私も負けてはいません。そうムキになつてその友人と対抗できる下級生をもつて私は再び嬉しくなるのです。またこれから一年半。今の一年生と共に部生活を歩めると思うとす

商科三年 巴 公子

かりした上級生にならなくてはとひとり意気込んでしまふのです。

卒業した後、新入生の心のかたすみこに良き上級生の番付として、たとえ最下位ながらも私め名が名記されることを夢に描きながら、こおろぎの鳴きしきる秋の夜中に、オセンチにもこんな事を書き続けているのです。

関西遠征転戦記

四年

佐藤健

三月十日夜九時二十分第二なわで東京を發つた。車中、監督や女子部員の差し入れを食べながら眠れぬ夜を過した。例年関西遠征をしているけど、いつも不本意を成績に終っているので今年こそはと、皆意気盛んだつた。そして五分以上の成績をとらなのと全員丸坊主という事がなんとなく決つていた。それには二月十七日から二十八日まで合宿、三月一日から九日まで強化練習をやつたので皆んな自信があつたのかも知れない。

とにかく、合宿、強化練習に参加した伊藤、斉獲、石田、佐藤、本目、上野、大竹、川島、山田、篠原、那波の十一人が大阪へ向つた。

第一日（十一日）

大阪もやっぱり寒く今にも降り出しそうなくもり空だつた。今日の予定は午前大阪府立大学、午後大阪市

立大学と戦うので、朝食後大阪府立大馬場へ直行した。馬場に着くと何んとなくのんきに構えているので訳を聞くと午後市立大馬場でいっしょにする事にしたからよろしくとの事たつた。試合まで暇なので馬を見たり、部活動の話をしたりして過した。二時大阪市立大馬場でいよいよ試合が開始された。第二戦の大阪市立大は最終に騎乗した伊藤が大きく食つて逆転勝ちした。第二戦の大阪府大は勝つていた試合であつたが経路違反が出て敗れてしまつた。こういう敗け方は本当に残念でたまらない。

試合後我々の寄宿先関西大学合宿所へ行つた。三階建ての近代的な立派な合宿所で居心地良さそうだつた。部屋にはストーブがあるし、旅館よりぐつと安いし、我々についてはいた。夜平中・高倉両先輩がたずねて来られ激励され我は大いに意気が上つた。

対大阪市立大学

青山学院大学				
伊藤	本目	山田	斉藤	佐藤
-28	-140	-38	-14	-4
杉富士	秀波	杉王	安芸波	安芸波
-150	-100	-13	-3	-6
高橋	二神	本田	福崎	久田
大阪市立大学				

差48点で本学の勝

対大阪府立大学

青山学院大学			
斉藤	石田	伊藤	山田
-11	-190	17.75	0
秀波	杉王	杉富士	杉富士
-30	232.5	-17	-51
大藪	居村	伊藤	久渡
大阪府立大学			

差124.5で大阪府大の勝

第二日（十二日）

朝からみぞれが降ってものすごく寒い日だった。こんな日に試合をさせてくれる神戸大・甲南大にはまったく申し訳ない気持ちだった。皆んな合宿所の近くめ食堂で朝食をとった。東京で食べられないかやくうどん

に人気が集まった。これからここで合宿所にいる間、食事をすることにし店の人に頼んで、六甲のふもとにある神戸大馬場へ行った。六甲山は雪らしくスキーを持つている人を多く見かけた。甲南大の馬が到着すると間もなく試合が始った。天候が最悪なので三校いっしょに試合をするという変わった方法で行われたのである。その結果一位青山学院大学、二位甲南大学、三位神戸大学となった。全馬満点馬なので一落一拒止の差であった。難馬はともかく満点馬なら必らず満点でゴール出来るといふ我々の自信がこの勝利を得たのである。尚この試合中、甲南大の人が馬場の中で馬に踏まれ急救車が来るという事件があり一層寒く感じられた。

第三日（十三日）

くもりでやはり寒い。今日は関西で最も強豪といわれている関西学院大学と午後の関西大学との試合である。

関西学院大学の美しい校庭を横切つて、網島の馬場の四倍もあるような広い馬場で試合が行われた。月駒・月緑・凡響の三頭で五名戦である。昨年は我校の経路違反二つをもって惨々たる試合だったが、こんどははずかしくない試合をしようと全員張切っていた。全

馬共良く飛ぶから一つ一つ丁寧に障碍に向ける様注意して臨んだ。結果は五点の差で勝つ事が出来た。皆んな本当に良く乗って満足した試合だった。試合後の親睦のレセブシヨソでは月雪の話題で終始した。

午後今まで厄介になっていた合宿所を引き払って、

対関西学院大戦

青山学院大	本目	-4	月緑	-5	竹下	関西学院大
	山田	-3	月緑	-0	奥平	
	藤	0	月響	0	高橋	
	佐藤	0	月駒	-3	植田	
	伊藤	0	月駒	-6	別所	

差5点で本学の勝

対関西大戦

青山学院大	山田	-65	月光	-3	橋本	関西大
	伊藤	0	月光	-7	村田	
	佐藤	-4	千駿	-3	米田	
	藤	-7	千鳳	0	間宮	
	石田	-5	千嵐	-5	迫	
	本目	-4	千嵐	-5	若原	

差62点で関大の勝

すぐ近くにある関西大学馬場で試合を行つたが皆んな少しずつ食われ敗れてしまった。本当は今晩も泊る予定の合宿所をこちらの手落ちで泊れなくなったのだが試合を観に来られた平中先輩の御好意により同氏の家に皆喜んで御厄介になる事にした。合宿所にいる間多大な迷惑をかけ、又大変お世話になった関西大馬術部によく礼を言つて、平中さん宅へ行った。明日試合する予定だった同志社大戦が都合で取消しになったので明日は終日という訳で今晩は自由である。食べきれない程スキヤキを御馳走になって、それぞれ大阪の町へ出かけた。中には、ずっと部屋に居て麻雀をやつていた組もいたけど。

第四日（十四日）

久し振りにゆつくり起床した。坊主にならなくてよいので明るい雰囲気である。

平中先輩の家を十一時発つて名古屋に夕方到着した。昨年もお世話になった真野君のところへ今年も又よろしくとなった訳である。

夜名古屋市を散歩に出かけたが、四年生は部屋にいてテレビ見てすごした。金がなくて外へ出ないのか、疲れて出ないのか理解しがたいけど

第五日(十五日)

遠征期間中始めて良く晴れた暖たかい日だった。名古屋から約一時間・バスに揺られて森林公園に着く。

第一戦の名古屋市立大戦は惜しくも引き分けに終わった。食い数も全く同じで仲よく引き分けたがこういう試合は、あそこを落さなければ、あそこで拒否されなければと色々思われて来るものである。

第二戦の名古屋工業大戦は相手のミスで勝った様なものである。うちは第一戦と同じメンバーで対戦したが一戦の時より内容が悪い戦いぶりだった。次に名工大・名市大の混合チームの新人とうちの一戦二戦の出場しなかつた者との試合をやったが大差で敗れてしまった。

以上で全日程が終り森林公園で解散。

対名古屋市立大戦

青山学院大	大竹	0	勝誉	0	猪飼	名立大
	佐藤	-4	松緑	0	小林	
	伊藤	-5	豊風	-54	永井	
	斉藤	0	早風	0	植松	
	山田	-10	輝光	-10	岸川	

差0で引き分け

対名古屋工業大戦

青山学院大	大竹	-3	勝誉	0	星谷	名工大
	佐藤	0	松緑	-70	大林	
	伊藤	-10	豊風	-10	市川	
	斉藤	0	早風	-23.25	金沢	

差58.75で本学の勝

対名立大・名工大混合新人数

青山学院大	那波	0	勝誉	5	小林	名立大
	篠原	0	松緑	0	安藤	
	川島	-210	豊風	-182	菅沼	
	石田	-14	早風	-29.75	丹羽	
	本目	-121	輝光	-19	井上	

差111.25で本学の敗

# 試 合 報 告

これで今年の関西遠征はレギュラー戦五勝二敗一分新人戦一敗という結果に終わった。レギュラー戦はともかく新人戦をもつとやりたかったと思うけど、この悪天候の中、我々のため心よく試合をさせてくれた各校に本当に頭の下がる思いであった。この遠征の好成績を我々はつきや運で勝つたとは思わない。これから数

四月六日 関東大学新人戦

(於馬事公苑)

第一戦 本学○……×法政大二部

第二戦 本学○……×中央大

準決勝 本学×……○立教大

五月十四日 対関学大定期戦

(於馬事公苑)

本学 ×……○ 関学大

多い試合、特にトーナメントに備えて大いに自信をつけ、努力次第では一部へ上がる事も可能になる訳である。

最後に遠征期間中大変お世話になりました関西大学馬術部、平中先輩、高倉先輩、真野君に心から感謝致します。まして関西遠征戦績記を終わります。

## ＝ 対 外 試 合 ＝

8月11日(快晴) 於網島グランド 対神戸大学

本 学		神戸大		
選手名	減点	馬 名	減点	選手名
山 田	69	青 藤	55	新 垣
稲 熊	3	雷 神	3	泉
那 波	6	雷 神	0	及 川
本 目	4	青 潮	17	坂 根

青 学 - 82

神戸大 - 75

その差9点で神戸大の勝

8月22日（晴）於網島 対北大A・B戦

本学		北大A		北大8		
選手名	減点	馬名	減点	選手名	減点	選手名
篠原	14	雷神	0	小栗	10	松尾
稲熊	11	青潮	1245	加藤	57.5	八木沢
中村	70.5	青藤	67.5	近藤	70.5	呉

青学-95.5 北大Aとの差 96.5  
 北大A -192 北大Bとの差 42  
 北大B -137.5

) で青学の勝

9月5日（快晴）於網島 対甲南大戦

本学		甲南大		
選手名	減点	馬名	減点	選手名
山田	13.25	青渚	75.5	杖久保
上野	76.75	青藤	167.5	渡辺
那波	0	雷神	3	菅
稲熊	0	青渚	125.5	伊藤
本目	3	青潮	147.5	山崎

青学 - 95  
 甲南大 -519  
 その差426で青学大の勝

個人戦成績報告

五月三日 都民大会（於馬車公苑）

一般サンジュールジュ賞典馬場馬術

伊藤正昭 第五位（青武号）

六段飛越競技

伊藤正昭 第一位（青渚号）

五月十九日 関東選手予選登上

（於馬車公苑）

伊藤正昭 （無審査合格）

本目 晋 失格

石田謙三 失格

山田恵道 第三位

乙種馬場予選

伊藤正昭 第一位

山田恵道 第二十六位（失格）

障碍の部

伊藤正昭 第九位（この結果関東選

手に選ばれる）

六月八・九日 東京馬術大会（於パレスクラブ）

婦人サンジェルジュ賞典馬場馬術

平木茂子 第一位（青武号）

第二位（雷神号）

一般サンジェルジュ賞典

伊藤正昭 第四位（青武号）

六段飛越競技

斉藤良也 （一拒止の後完飛）青武号

中障碍飛越競技

伊藤正昭 （失権）青渚号

回数飛越

高橋八重子 （失権）青渚号

九月一日 国体・全日本都予選大会（放馬事公苑）

複合の部

一般サンジェルジュ

平木茂子 青武号（第四位）

雷神号

青扇号

複合の部

本目 晋 青潮号（失権）

中 障 碍

伊藤正昭 雷神号（失格）

本目 晋 青潮号（矢格）

山用恵道 青渚号（失格）

六段飛越

伊藤正昭 青渚号（二完飛のち失権）

九月八日 神奈川県大会（於保土谷グランド）

馬場の部

B 馬場馬術

松本祐子 （青扇号）

高橋和子 （雷神号） 第五位

巴 公子 （青扇号）

平木茂子 （青扇号）

一般サンジェルジュ賞典馬術競技

伊藤正昭 （青武号） キケン

那波広和 （雷神号） 第八位

平木茂子 （青扇号） 第二位

障碍の部

一般小障碍

岸 祐子 （雷神号） 第一位

高橋八重子 （青渚号） 第三位

一般中障礙

伊藤正昭

(雷神号) 第五位

本目 晋

(青渚号) 第二位

六段飛越競技

山田恵道

(青渚号) 第一位

九月十四日 関東自馬對抗馬術大会(於馬車公苑)

伊藤正昭

雷押号 合格

佐藤 健

青渚号 合格

本目 晋

青潮号 失格

上野圭一郎

青藤号 失格

九月二十九日 関東学生女子選手権大会(於馬事公苑)

岸 祐子

失格

高橋八重子

失格

高橋和子

第五位(関東選手)

松本祐子

失格

巴 公子

矢格

尚、試合の記録が完全に揃わなかった事をお詫びし

ます。

次に、今後のスケジュールを御報告致します。

十月十九日・二十日

アバロン馬術大会  
国際親善馬術大会

十月三十一日より

十一月 五日まで

(於アバロン乗馬学校)  
青山祭

十一月 三日

” 十日

部内馬場審査会(於網島)

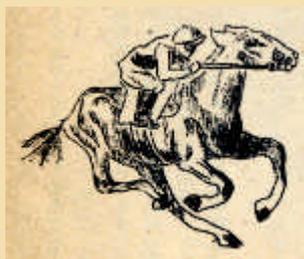
部内對抗試合(於網島)

十一月二十七日より

十二月 二 日まで

関東学生トーナメント

二部決勝



# 夏季角館（秋田県）合宿報告

（七月二十六日～八月一日）

経済科二年 篠原敬明

## その一

「飲みたいムードだな」

「そそそ、そういう風！次の駅はどこだい。でも良いのか？飲んでモ」

「ああ、汽車の中はヨ良いんだってヨ、向こうへ行きやヨ駄目だけヨ。」

「チクシヨウーあいつもう寝てやがる。おい、起こせよ。一人だけ寝るとは虫が良過ぎらあ、付き合わせろー  
ーおい、起きる起きろー」

「おい、クマ、ビールだぞー」

だらし無く足を伸ばし、座席の手すりに寄り掛かって眠っていた稲熊二年生が、その名の通りムクムクと起きだした。

「え、ウーン、どこどこ？」

あた少を見回わし、ビールを捜す手付きをしたので、我々はどつと笑った。

手すりの上の煙草が夙に吹かれて転げ落ちそうであるし窓硝子を透かして見ると、闇の中を北国といった感じの景色が飛びかう。帰省客や休みを利用しての旅行者で車内はごった返していた。汽車の速度が落ち、駅に到いた。

「それ、早く行って買って来い！」

一年生が慌てて下車して走って行ったが、まもなく帰って来て、

「売ってませんよ。」

「そんなら水汲んで来いヨ。」

「そんなミズ臭い！」

## その二

朝五時の起床ラッパならぬ本目三年生の濁声が、無惨にも、十四人の若きおのこと無数の蚊を、夢から現実連れ戻して一日が始まる。中には今だに現実に帰ることを躊躇して、夢と現実の間をさまよっている一

年生のごときもいる。

「こら、宮島！ボサーとしてないで早く馬装しろー」

「ハア、でも………？ ハイ！」

この哀れな若者達も一時間とたたない間に、自分の置かれた境遇を忘れさって、馬上で歯をくいしばって、今日の鏡上げに尻を鞍に打ちつけているのである。

「右手を上げー」号令者の  
はらわたの飛び出しそ  
うな声に必ずべく、若者達  
もさつと右手を上げた。  
しかし打ち続く疲労には  
勝てず、腕が上がり過ぎ  
たり、下がりが過ぎたり、  
肘から曲っていたり、平  
衡を保とうと一生懸命に  
なったりしている。その都度上級生の叱咤や鞭が飛ぶ。  
一昨日の雨は水はけの悪い馬場のいたる所に水溜まり  
を作り、とりわけ西側の隅角は、蹄はもちろん繋や球  
節辺まで埋まる程ぬかるんでいた。先頭をきつていた



間明田一年生、「これっしき、何するものぞー」と勇  
んではみたものの、疲労の色濃く、吐く息ゼイゼイ。

そのうち前の家の屋根が傾き、窓が傾き、地面が傾む  
いて、そのままぬかるみの中へパチャーン！馬君、間明

田一年生の右手が痺れたの  
かと思ひ、マツサージのつ  
もりか、伸びた右手をギユ  
ギユギユ、

「ウイテテテ……これが二馬  
力の重さか！」

### その三

「すみません、水下さい。」  
井上一年生が変に神妙に水  
を所望する姿は、もはや一  
日二回の手入れにとって、

欠かすことの出来ないもの  
となつてしまつた。今では買つて来た粉末ジュースを  
この水で溶かして飲むほどまでになつていた。馬は今  
川から上がったて来たばかりで、立髪や尻尾から水をた

らしながら繋がれていた。

五頭の高校の馬と新しく借りた二頭の馬は、ことごとく附近の農家に散在して預けられていた。遠いものは往復四十分から五十分もかかり、朝夕の練習に多大の影響を及ぼさるゝでもなかった。激しい練習の汗を清水に流して、五分も歩くと大きな藁葺き屋根の農家に突き当たると、永泉と秋栄のいこいの我家である。

「苦勞さんでがんです。どうぞ。」

ジュースの味やいかに？ヤカンの水は歯にしみる程冷たい。いつもの様に皿に山盛りの御新香が出された。

口の中に入れるとこの町の人達の親切が甘ずっぱく口の中をおおう。先日もこんな事があつた。

一〇個の長靴の音が吸い込まれていきそうな夕暮れの田舎道を手入を終えて宿舎に急いでいた時、宮島一年生が昼間の暑さと疲勞の為鼻血を出した。その時急に生垣の向こうから声がかかった。

「まんま、ハナズ（鼻血）出しなすたかね。コッツさ来て休みなんし。」

「あ、どうもすみませんです。」

いかにも旧家といった感じの大きな農家の座敷から、お針子さんが三人程、仕事の手を休めてこちらを見つ

めていた。宮島一年生は長靴をはいたまま、縁側に長々と寝そべって、流れる血を止めようと懸命である。

「お前さん方東京からおいでヤンしたかね。どうぞ、こつちさ、昼間はなににして暑くなりやんし、馬コも、テイヘン（大変）でがんです。コクテイ（国体）さ時は、おらさとも、なばかツバケン（千葉県）ツウタ人が宿りやんしてよ。」

流れる様を東北弁、右の耳から左へぬけてなんにも「まんず、オハギでもどうぞ、ゆっくらさしておいでなんし。」

「いただきます。美味そうなオハギだ。これだけは判つたよ。オハツカシイ！」

#### その四

夜が来た。昼間の厳しい暑さに変わって涼が入ると、人々の顔にも緊張の影は薄れ、解放感がなごやかなムードをかもし出していた。やぶの中の虫が電燈の回りを渦巻き始める頃、きまつて町の馬に係のある誰れかが現われ、反省会は別の方向にそれるのである。昨日は高校馬術部の田口顧問が見えた。高校生も時折や

つて来て、我々と一緒に円陣を描く。部長さんから、  
県の連盟の人まで見えたのには、我々も驚いた。県下  
唯一の高校馬術部は毎年の国体は約束されており、二  
年前の十六回国体はこの町を一層馬術の町とするに役  
立った様だ。

下駄ばきに、うちわ片手と気軽なタッチで丹波老人  
が現われた。元陸軍大尉で五十年の馬歴を持つとか。  
まずこの町の様子を一くさり。

「この町は旧佐竹公一族の者が大分おりやんしてな、  
今でも佐竹公のお屋敷が残っておりやんす。ええ、え  
れえ立派な家でがんす。」

「それに、こつつら辺は秋田お婆この産地でやんす。  
それ、かすりの野良着に姉さんかぶりの、色の白い  
ポチャポチャとした、本場の秋田お婆こでがんす。明  
日は田沢湖へおいでやんすとか、道々野良仕事してや  
んすから、どんぞ、見ておくんなんし。」

そつでがんすが？それにしても秋田オババならいざ知  
らず、秋田お婆こには今だお目に掛からんですわ。

「青山学院の技術はえれえ高けえどな。なんに、渡辺  
さんとこの馬コは、障害なんか一度も飛んだことのね  
えつうやつでがんしたが、イスダハンツオが調教しん

さつて、飛ぶようになり  
んすワ！」

「イスダハンツオて？……」

ああ、石田班長、石田さ  
んの事？」

「イエスダ！」

## その五

「今日は滅多にやれることでもないからスチーブル  
をやる。皆なも判っていることと思うが、余りとばす  
な。時間は充分あるし、距離もそんなに長くないから  
ゆつくり帰つて来い。肉屋の馬はまだ未調教だから、  
デカイ方の障害は飛ばなければ、無理して飛ばさなく  
ても良い。川の中は絶体常歩で行け」

例によって、例のどとく石田班長の訓辞が終つて出発だ！

「十二番、十二番、ハイ十二番、出発三十秒前、二十  
秒前……三、二、一、 出発！」

カツカツカツカツ、「秋峰君、まず最初は速歩で行こ  
うヤー」五百米程走つて振り返えると、石田班長を乗  
せた八敢がすごい勢いで追つて来る。さきほどの石田



班長の訓戒を思い出し、一人ニンマリ！

「ここよりAまで駆歩」午前中作った標識が左前方の大木の上に見えて来た。「よし駆歩で行こうや！」単車がすれ違った。

橋を渡る頃になると、後ろから声有り。

「前でもたもたしているサラブレットだか何だか知らない馬追越しちゃえよ。」

「そんなの追越違反ですよ。そうですか、じゃあ！」

三頭一諸に並んじやった。さあどうなるでしょう。

自然の中で馬上豊かに感じるものは、馬に乗る者だけの特権であろう。檜木内川堤の桜のトンネルは、右側に川の流れをのぞかせて、長く続いていた。

「この辺に障害が有った筈だけどな？」

右側に標識が見えて来た。「右へ進め」と書いてある。道路から一段下った窪地に横木障害と井上一年生が立っていた。

「ちよつと、障害飛ぶの待って下さい。写真とりますから、まだですよ。」

「はい！良いですよじあああ！駄目ですね。もう一度やり直おして下さいよ。」

「そでうですか。ハイ、」

流れは目に錯覚をおぼえさせ、強く追って来る。馬

は慎重に一步一步前進して行つた。その都度しぶきがパツト白い花を咲かせた。水泳を楽しんでいた子供等が、水の中から顔を出して、こちらを見つめている。

国体の時は、この川がスチーブルに使われたとか。多少の優越感に浸り、川から上がるや、いざゴールに向わんとした時、

「コチン!!」

髪の毛がピンと立ち、鼻からツンと息がぬけ、目から星がチカチカチカ？

「チクショウ、痛え！こんな所に木が有ったか？」キが付かなかつた。

## その六

この合宿を最も合宿らしくあらしめたのは何か？

それは川だ。合宿所の前を流れる檜木内川は我々に幾多の恩恵を与えたり練習後の馬の水浴はもろろん、水泳から洗濯まで全てこの川の厄介になつた。朝は水底からわき立つような朝霧に眠気を醒まし、夜はせせらぎの音を子守歌に眠る。土堤ぶしのトレーニングはパテさせるに充分だし、百米程ある川幅は発声練習には

恰好の場所である。

全身の力を下腹に集中し、口を大きく開けて、四五度に声を放り出すのである。

「マキ、ノーリ」

少し力をゆるめると、声は流れにかき消され、「キコエナイゾー」とコダマが帰って来る。二、三日、声がかすれて、しょぼくれたムードが続いた。

夜ともなれば、橋の上は恋の語り場所になる。本目三年生がうるしの木に負けて、カブレたのは一昨日である。見るも無惨なこの姿！顔が一まわり大きくなり、腫れ上がった顎は二重になって、前より色男になつたもよう。川島二年生もかゆさに顔を伸ばしたり、縮めたりしていたが、ヤマガニが効くことを聞き付けて、遠々十二キロもある山の池まで、カニを取りに行く、涙ぐましさ！ああ哀れなり！しかしこの努力もむなしく、ついに川向こうの熊谷医院に助けを借りたのである。医院へ行く時は常に石田班長が付き添った。別に用も無いのに変だなあ？

二日もすると、橋の欄干に腰を下ろし、白衣の天使と恋を語る班長の姿が見られた。ああ、生まれて初めてモテタこの瞬間！

## その終り

「秋だなあ！」市役所の屋上から見る月は薄青く、今朝までの緊張した毎日に比して、余計佻びしく身に迫まる。恋でも語りたいムードだ。ああ、それも、隣に居るのが稲熊、中村二年生に、田口顧問ではね！しょぼくれたムード！

夕方の角館駅は混んでいた。高校生の見送りの中で、二人の女性？は色取りを添えていた。ホームで円陣を作り、校歌斉唱の後、華やかな見送りを受けて、彼等は立った。立つ鳥あとを濁さずと言うが、大いに、濁して、我々居残り三人組の肩身を狭くした。

全ては終わったのだ。皆な力一杯頑張った。校長の訓辞に始まつた青山学院大学対角館高等学校親善試合も予想通りだった。田口顧問の弁を借りると、

「全くうまく行きましたよ。一、三校合宿の申し込みが来てたんですがね、合宿やらせると毎年、何か良くないこととして帰るんですよ。だから今年も「断わろう」なんて言ってたんですが、『青山学院だったら大丈夫でしょう。私が責任を持ってやらせます。と校長の前で言っちゃったんですよ。そんな手前も有るんでね。』

「私達も五日から、国体に備えて合宿に入るんですが、おたくの良いところをどんどん取り入れてやりますよ。もちろん発声練習もね。とにかく良かったですよ。」  
角館の月は青かった。そして秋の夜は更けて、すだく虫の音に……………。

## 女子大室合宿記

中西 紀子

八月二十六日

我等後半合宿人員十一名。伊東着十二時。これから備えて栄養を取るべく駅前にてお食事。人气的には風流にとろろそば。氷いちごと、いちご氷の相違などをまくしたてながら、出だしは好調。無事大室高原に到着。小室先生の、前半の人達の落馬の話やその他をあいさつかたがた聞く。さっそく、熱心なる岸さんに引いられて、午後の練習。馬がきめられる。皆緊張する。初日なので練習は比較的楽。馬装のまま、車（？）でお食事に行く。帰る頃には、霧が深いつつある。一年生が、大室山に登りたいと言い出し、岸さんを先頭

に立て、有志で登る。しかし頂上に着いた時は、もうすつかり暗くなつて、サボテン公園の燈と、ハイウェイの照明燈が、明るく見えた。降る時が大変。何せまんまるい山ですべすべして降りようがないのだ。翌日のキユロツト姿は、悲惨。明日の快晴を願つて九時半消燈。一年生の興奮したつぶやきが、ブスブスと長い間、聞える。

八月二十七日

起床五時。無情な時計の音。外は依然として夜の続き。まだぼけた目をこすつて、五時五十分練習開始。朝の太陽と、霧の新鮮な事。しかしながら、練習はそんな事を言つてはられない。油断をしていると、すぐきびしい上級生の声が飛ぶ。手入れと、お食事を済せると、九時から自由時間。何やら皆、レターペーパーなるものを、モソモソと取り出して来る。ナニに出すつもりらしい。名文章ば浮ばないのか、他人の頭を貸りる人もいる。(男性諸君、手紙は、必ずしも本人の文章ならず。)十一時トレーニング。皆、服装はハイキングスタイル。ところがところが、まさしくハイドトレーニング。二列になつて、かけ声高くマラソン。そのかけ声の問題。一・二と誰かとかわるがわる言

い続けて下さい。必ず違った言葉が生れて来ますから。終って足を引ずるようにしてお食事。次の自由時間には、横になったまま。でも若い私達は、三時の練習までには皆元氣回復。夕食後は、オフロを浴びてさっぱりとし、霧でつまれたゴルフ場を眺めて皆少々ロマンチック。「再会」とか「幸せはここに」など誰からもなく口づさむ。反省会は九時十五分。馬の研究に皆真剣をまなざし。消燈後、オフトンの中で、仮空の手綱を握りしめ明日こそは乗りこなそうと意欲を燃す。昼間の疲れからグツスリ。夜半、台風がおそう。

八月二十八日

起床ベル五時。ぶきみな雨や風が、屋根に窓にうちつける。夜中降り続いたもので、屋根裏室である、私達の室は、雨もりが大変。岸さんが、起床を延すと皆歓声、オフトンの中にもぐりこむ。それでも七時頃起き出して、もうやみやんだ馬場で、朝の練習。文字通り泥まみれになって、真剣な練習。そして、練習後は昨日と同じくハードトレーニング。この辺りからお天がくずれ始め、日焼けを目的としている人達は、がっかり

八月二十九日

今日の馬場は不良。したがって朝の練習は外乗。小室先生の後についてぞろぞろと馬を進ませる。サポテン公園を、一廻り。始めて見る一年生は、意外に立派な公園なので驚いている。ゾロゾロと通る馬の列に人々は、何やかやと批評をする。自分の馬の悪口を云われるのはとつてもイヤ。上手いところを見せようと拍車等を入れて見る。練習後はいつもと同じ。自由時間は、そろそろ疲れが出て来たのか、割りあての分のお菓子を、寝たままポリポリ。反省会は、自分自身の欠点が良い解る。一年生は、どんどん吸収して行く。

八月三十日

そろそろ五時起床になれる。今日は、小室先生が昨日おっしゃった、アプミ上げ。何だか心が重たい気分。一年生にとつては、始めてである。でも意外に無事に皆、ついて行き、岸さんも満足気。今日は、連日のトレーニングで体が痛いのでヤメと衆議一決。解放され、寝ては食べ、とふとる要素のくりかえし。後一日で終りというので、そろそろホームシック気味。荷物の整理など始める。

八月三十日

いよいよ帰る日。しかし朝の練習はいつも通り。い

つもと違って小室先生の提案により、馬場の審査会。ところが朝から又台風の襲来。晴れ間をねらって一年生の馬群をきめ、やってしまおうという。ところが雨はひどくなるばかり。ついに落馬があり、とりやめになった。あきらめて、いよいよ帰りじたく。最後までふられて、台風に送り出された感じ。バスに乗ったとたん、からつと晴れた時の憎らしさ。それでも一年生は、かなり上達し、今年の合宿も、まあまあ無事終了。

## 北海道遠征の思い出

英文科四年 岸 祐子

ポプラ並木でお馴染みの北海道大学で今年も招待全日本女子学生馬術大会が開かれた。今年で六回目を迎えたが、かつて、青山が勝ったことのない試合である。思い返すに、去年の夏、現在の四年生が三年で役員を継いだ直後の大胆な遠征の企てであった。平木コーチと斉藤君と柴田（克）君がつきそいで、三年二人を

頭に、勇んで出かけたまでは良かったが、その敗つぶりのよさ。そのくやしさ。はるばる北海道くんだりまでやってきて、敗けに來たとは。余りのくやしさに涙も出やしない。それから、我々の間の合い言葉は、「来年の北海道こそ」思い出してみるに、我々今の四年の女子は、このために、毎日練習に練習を重ねた。と言つても過言ではない。私と渋谷さんが行ったのであったが高橋さんと伊沢さんに、どんなにか、そのくやしさをぶちまけたことが。又彼女達も、絶対に、来年こそ、四人で行つて、この雪辱を晴らそうと誓つたことか。あれほど固く約束したのに、実際に行けたのは去年と同じ二人であった。伊沢さんは体をこわし、渋谷さんは就職のため。私と高橋さん（八重子）はとても残念であったが、こうなつたら、私達二人でガンバツテやるだけやつてこようということになった。幸に、平木コーチと伊藤主将がついて来て下さり、鬼に金棒であった。人数も去年より少く、選手五名、一年生二人だけの小規模なもので遠征という感じのしないなごやかなものであった。

七月二十三日の第一目は団体戦が行なわれた。私と八重子の気持は、言葉をかわさなくとも、びつたり

である。が、第一回戦で北大Aチームとあった時は、てつきり、もうだめかなと思つた。馬歴十年以上選手の滝沢さんが強敵であつた。案の定、みごと私が滝沢さんにくわれた。が幸運にも、敗者復活で、危い所、勝ち残り、準決勝、決勝と残つた。私達は決して負けるとは思つていなかったが、いかにせん、馬の、特に貸与馬の試合だけは、つきがあるかないか、大いに關係するので、樂觀はしていなかつた。実際、決勝までは夢中であつた。二人とも相手をくい、いよいよ決勝で宿敵北大Aチームと一戦を交えた。八重子は洋考で満点でゴール、相手も満点、残るは私と滝沢さんの朝清が勝負馬となつた。考えるに、滝沢さんは、自馬であるし、きつと油断していたのだろう。私にとつて連のいいことおびただしかつた。私がタイムオーバーを少しして、一逃避少なく、一障害飛越して、それから、タイム減点をさし引いた、わずか五点ぐらいの差で、勝つた時には、実に本当のように思えなかつた。又、平木さんの喜びようときたら、「貴女達よ、うやつと勝つたわね。北大の滝沢さんと学習院の斉藤さんにくつて勝つたのだから、もう言ことないわよ。」今度はうれし過ぎて涙も出なかつた。この日は、二度

目の平木さんのお父上様の御ちそうで、夕食を皆でグランド・ホテルで共にし、優勝を祝つた、そして、明日の個人戦もまた、ということになつたが、結果はみごと滝沢さんに優勝を持つていかれ、私が二位という所であつた。八重子は準決勝まで行つたのだが滝沢さんとあつたので惜しくもやぶれた。私は、ただ、幸についていただけであつた。

とにかく、試合の終つた時は、いつも敗けてばかり、いたものだから、勝つても、ぴんとこなかつたが、東京に帰つて来て、皆に、おめでとうと言われるたびに、八重子と二人、そつと、目を見合せて、にこつとする。実際、八重子がいてこそ、勝てたのだし、我々が、四年間馬術部を続けてきたからこそ感じる喜びである。下級生の皆さんも、我々の良い所だけ、みならつて、来年も、立派に戦つてほしいと思います。

## 釣りとなつたし

内藤 長一

(大正十四年卒)

釣りははじめて、かれこれ三十年を越してしまつた。住いが藤沢市の鵜沼なので、釣好きの私には非常にめぐまれていたわけだが江の島、腰越、鎌倉方面に住む釣仲間のうちで、いつしかわたしが一番古株となつてしまつた。漁師の多くもおやじの代から息子の代になつたが、わたしは天気さえよければ毎朝四時半か、五時にはぬけ出して湘南の沖へ船を出して糸をたれる。釣れても釣れなくても八時半にはかならず帰ることにしている。最初、漁師たちは「あきべえダンナだ」といつていたが、いまではわたしの気がわかり、未練なく引揚げてくれるようになった。わたしは、楽しみでやる釣りが、疲れを仕事に残すようなことがあつてはならないと思つてゐるからだ。

こんなに釣りに魅せられたことの一つは、江の島のかげで釣りをすると、はるか西の空に山並みを越えた富士が見えるからだ。その日の天候や、ときには海

つらや雲ゆきなどによつてわたしの目にうつる富士の姿は常に同じではない。あかつきの富士、夕ばえの富士、雪をいただいた富士と、どの富士を見ても秀麗とも、壮厳とも、いろいろな形容詞にふさわしい感興を覚える。ときには南画風の絵や広重張りの浮世絵、あるいは大観の筆などの印象を思い浮べると、また違つた姿に見えるものである。

このような富士も漁師たちにとつては、父祖相伝の勘(かん)と、長年の経験から富士を見ることによつて気象をつかむことができるという。つめたい藍(あゐ)色にたな引く山脈を従えた富士が、朝日を浴びてそびえ立つ姿を見れば、わたしは沖に船を出す。頂上にかかる雲の色、西の肩に流れる雲、東に起る巻雲などによつて、北風になるとか、西から吹込むとか、だしぬけの神立ち(にわか雨)の襲来を予知できるのも、この富士を絶えず見ているからだ。

わたしは漁師たちからこのことを何度も教えられたが、会得できない。わたしにはやはり理屈ぬきにながめる富士が一番好きだ。船釣りに出たら、素直に船顔の勘にゆだねて、釣りを楽しむのが無難というものがある。

(朝日新聞)

## 社会に仲間入りして

鈴木 宏志

馬術部生活に我が身を任かせ、夢のように過ぎ去った四年間も今では、あのように汲瀾万丈な生活は味えぬサラリーマンと化した。

人生第二のコースに踏み入れた現在では、馬術部の未練もかなぐりすて新入社員としてあわただしき毎日を送っております。入社以来まだ七ヶ月である私もやつと仕事も身について来た今日此頃つれづれになるままだに学生とサラリーマンについて考えてみた。

会社というもののきびしさは十二分に学生時代より諸先輩に聞かされ覚悟はあつたがやはり実際に感じてみるとしみじみとそのつらさを知ることができました。考えてみれば、学生ほど気楽で自由というものを最大限に与えられているものはなかった。会社は学生生活を絶えた者に対してはその能力を十二分に發揮されんことを望み、それ故に仕事は容赦なく大豊に与えられ

るものである。私なぞ新入社員は毎日書類の中にうづまつてしまいうっかりすると仕事に追いまくられてしまふものである。次から次へと与えられる仕事は、必ずやスムーズに為し遂げることはまれであり、仕事に對する疑問と研究とが生ずるものである。この時点において私がいつも感じることは、学生である、学生なれば書籍を買入れたり、図書館へ行つて調べることも可能である。

一度会社に入ったものに対してはこのように時間的猶予は許されるものでない、スピードと安全を願い、すでに疑問に思つたことは上司に簡単に聞くだけに終つてしまふ。したがつて仕事というものを非常に経験的に運んでしまいがちである。しかし私など企画室に勤務しているものは上司に開いても明確なる解答は得られるものでもなく期日にもせまられると非常に苦しんでしまひ結局結果の悪いものが生じてしまふ時がしばしばである。

学生は自分の学ぶべきものは広範囲に与えられているものである、その広範囲なものを自由に選び、自分で課題をあげて納得の行くまで真理を探求することが出来るこれこそ学生の特権ではなからうか。

学生の自由は、また反面よほど慎重に考えなければならぬであろう、自由にほんろうして何の目的もなく毎日の生活を送られたのではない。この点馬術部にある者はその青春の血を馬に燃やし、泥にまみれて練習にはげんでいることは喜ばしいことである。

友を愛し、馬を愛し苦楽を共に大学生活を終えた私も非常に満足をおぼえたもののおまれにも馬というものにつつぱり過ぎたのではないかと感じられる、今になって考えたともそれは後の祭りである故にそれはこれが私自身学生時代に学び得なかつたもの学び解決して行くとして、現在馬術部に居る者に望んでおきたいことは決して学問をば忘れずに、すべてのものに疑問をもつて大学生活を送られたし、馬術部の性格自体が生き物を相手とする故に練習以外に非常に煩雑な仕事を要し、それだけに時間を効果的に生かさなければ馬に追われて落着いて勉強する時もなくなってしまう。ここで練習以外の煩雑な仕事と私が申しましたが、これは練習とみてよいであろう、この煩雑な仕事こそ馬術部独特の人間育成の方法である故に決して嫌わずに誠実さと積極性をもつてこの練習に望んでもらいたい。また練習は練習、勉強は勉強で徹底するよう

に心がけ、クラブ全体がこのような徹底したムードを持つて欲しい。あと一つ私が会社に入つて感じることは、体力に自信がなくてはならない、これは何事をするにも大切なことであるが会社に入ると運動する時間もないためにほとんどのものが病気になるってしまう、一人でも休まれると会社の仕事は停滞するものであり、本人にとつても非常に得なものではない、朝も早くから夜も遅くまであちこち毎日駆けまわつてびくともしない体こそ学生時代に作らなければならぬ、この点非常に馬術部で鍛えた体はものになると思う、人のいやがる仕事でも、また喜んでやれるのは馬術部にて鍛えた土根性と体力である。

健全な肉体に健全な肉体が宿る。とよく云われるがまさに体力がなければ積極的・精力的な活躍はできなくなつてしまふ。この精力的な活躍は若さ、フレッツシユな気持をいだけせるものである。新入社員ほど社会の新しい物事、試験に体面する数の多いものはない、私はたえず仕事に対する意欲を燃やし、少しでも自分の認識を多く持つようにつとめております。これもフレッツシユな精神と若さによるものであり、いつも入社した時の気持、馬術部にあるものは入部した時の気持で物

事にあたってほしい。どうか馬術部の諸君も二度と来ない学生時代を意義あるものとして送られんことを望み、最後に青山学院馬術部を諸君の手で育て発展され

## 昭和三十八年度緑鞍会総会報告

日時 昭和三十八年五月二十八日、午後六時

場所 青山学院校友会館集会室

出席者 青木 昇、羽坂勇司、沈 迺浜、東雄三郎

藤根 威、大島孝子、小池信夫、岡 良介

飯田和之、神藤重光、福原美里、佐藤一貫

村野吉昌、内藤喜嗣、岩崎 修、鈴木宏志

山田芳通、高井由紀子、他現役幹部

青木会長代理のあいさつにより総会は開かれた。議題にある昭和三十七年度の活動報告については、初乗会后、第一回四月に幹事会を校友会館で開催次いで五月二十八日緑鞍会総会で別表の通りの昭和三十七年度予算に対する決算の報告が出され、全員これを了承し

んことを祈ります。

昭和三十八年率

（株式会社田島順三製作所勤務）

た。ひきつゞき幹事改選に移り、今年度は、会員が増えたことでもあり、又もつとこの会の緊密を図るため、幹事を増加させてはとの意見が出て、昨年度幹事の、青木会長（据置）青木昇会長代理、沈、福原、内藤、村野、小池、上原、岩崎、木田、岡氏が再選、山田、高井の二氏が新しく幹事に決定した。

次いで新役員により、新年度の事業計画及び予算案が提出され、今年度の活動としては、慣例の親睦会と初乗会を開くことに決定。

親睦会（日程 場所 未定）

初乗会は一月十五日に、馬事公苑で開く予定にした。予算案については、今までの馬料、馬匹、指導員補助と分けていたものを、現役補助と一括することにした。あとは、現役にて適当に使用することにし、全員これを了承してこの会を終った。

大竹 記

# 緑鞍会決算書

昭和58年5月28日 於校友会館

項 目	昭和57年 度予算	決 算	摘 要	昭和58年度 予算案
前年度 繰越金	26,387-	26,587-		6,552-
会 費	180,000-	139,500-	予定額の78%	180,000-
寄 附 金		65,000-	国体参加初乗会	
預 金 収入利息		540-	日華信用普通口	
	<u>206,387-</u>	<u>231,424-</u>		<u>86,532-</u>
行 事 費	40,000-	35,900-	初 乗 会	20,000-
会 合 費	5,000-	4,000-	幹事会三回	10,000-
通 信 交 通 費	15,000-	16,695-	緑鞍会費徴収他	20,000-
現 役 補 助 金	120,000-	135,000-	コーナ国体参加他	100,000-
いなゝき編集費	15,000-	15,000-		20,000-
雑 費	5,000-	5,500-		5,000-
緑鞍会名簿		5,500-		8,000-
会長 餞 別 品		6,500-		
平木氏国体参加費		3,000-		
次 期 繰 越 金	6,387-	6,532-		3,532-
	<u>206,387-</u>	<u>231,427-</u>		<u>186,532-</u>

## 二部馬術部の現状

年々発展していく我二部馬術部は、現在部員数三十数名を数え、練習日は、水曜、木曜、日曜日と週に三回、それに祭日とに、東京乗馬クラブと横浜乗馬クラブで行つてお力ます。

そしてこの夏期休暇には、名古屋の森林公園にて初の地方合宿を開きました。参加人員が少なかつたのは残念でしたが、部員間の親睦、技術向上と、沢山の土産を持つて帰つて来る事が出来た事はよろこばしい事でありました。部員のほとんどが、アルバイト又は定職を持っている者ばかりですが、皆、練習には、仕事の事も忘れて、フアイトをぶつけています。

尚、先輩諸氏、並びに一部の皆様方の御協力を、感謝し、又今後共、御指導下さるようこの紙上をかりまして、御願ひ致します。

以下は、今年行われました試合の成績と、十月以降のスケジュールをお知らせ致します。

今までの試合

六月十日 本学二部×…… 法政大二部  
九月十八日 本学二部×…… 青学高等部  
最後に、去る九月二十二日行われました、役員改選により次の新役員が決定しました。

主将	水島政彦	副将	志村行男
主務	大塚義司	会計	金山 純
女子責任者	高橋瑛代	OB係	小林隆英
OBサブ	永田秀一	OBサブ	増田克子

今後ともよろしくお願い致します。

今年のスケジュール

十月二十日	遠乗り、御殿場
十一月一、二、三日	青山祭（馬寿司）
十一月十六日	三大学（於横浜乗馬クラブ）
十一月二十三日	OB対現役（於横浜乗馬クラブ）
十二月六日	慈恵大戦
十二月十五日	納会
一月十五日	初乗会（於横浜乗馬クラブ）

# 躍進めざましい

## 高等部馬術部

主将 三谷 稔

高等部馬術部の活動が再開した事は第五号の「いななき」で御存知の事と思いますが、今回はその後の活躍ぶりを御紹介致します。

前号に続きますが

十二月十六日～二十六日 強化練習（綱島）

十二月二十七日～二十九日

関東高校馬術トーナメント（馬車公苑）

一月十日 初乗会（清風会）

二月十日 対成城学園戦（成城馬場）四名戦

四月 新入生歓迎

四月より 綱島での練習開始（以前は東京乗馬）

六月二十三日 遠乗り（御殿場）

七月十三日～十九日 強化練習（綱島）

七月十八日～十九日 関東高校馬術選手権大会及び

国体東京都予戦（馬車公苑）

八月一日 対名古屋学院戦（清風会） 五名戦

九月一日 国体関東地区予選（貸与馬、対神奈川）

〃 国体東京都予戦（自馬）（馬車公苑）

九月十八日 対青山学院大学二部戦（清風会）

十月十九日二十日 アバロン大会出場予定

十月二十八日より 国民体育大会出場（二名）

十二月下旬 関東高校馬術トーナメント

まず昨年十二月のトーナメントから御紹介しますが一回戦、高等部馬術部のあらゆる力を注ぎ、みごとに学習院高等科に快勝し、勢に乗り二回戦、教育大学附属高校に相手しましたがこれも連覇しました。しかし三回戦強敵成城学園高校と善戦しましたが、わずかに及ばず三連勝を絶たれました。三回戦の敗者復活戦では法政二高に対し、これまた紙一重の差で惜しくも敗退しました。

一回戦

青学高 -319 …… -338 学習院 ×

二回戦

青学高 -525 …… -563 教育大附属 ×

### 三回戦

×青学高<sup>418</sup>……370 成城高

### 三回戦敗者復活戦

×青学高<sup>-389</sup>……364 法政二高

以上、二勝二敗の結果を持ちまして今大会農大附属成蹊、法政、成城に次ぎ第五位の成績を修めました。

一方、四月の新入生歓迎には綱島よりはるばる馬匹を持ち出し、大段的に宣伝を致しましたが、そのかいがあつて新入部員十五名となり旧部員合せて二十四名となりました。又、今度高等部馬術部発展のために大学の馬術部に加わっていたが、(土)、(日)曜日を大学の馬をお借りして練習いたしております。

次に七月の関東選手ですが、これに備へ、試験終了日から強化練習に入り非常に苦しい強化練習を行いました。この強化練習の成果が十八、十九日の試合に現われ、十八日の鎧上げ予選に四名参加中三名が予選を通過し、翌日の障害飛越の出場権を得ることが出来ました。そしてその決勝の日、一位、二位、四位を獲得致しました。尚この大会にて、十位まで関東選手となり、後に行われます東西對抗試合に出場出来ませぬ。

又、一位と三位まで国体東京都代表になれ、又九月一日に行われました関東地区予選をも通過し、晴れて国民体育大会(山口県)に出場致します。しかし国体予選に自馬で一名出場しましたが、少し過失を犯しまして失格となりました。

その他のオープン戦では

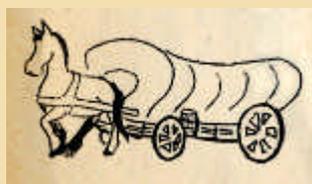
対成城戦 -85点差をもつて敗

対名古屋学院戦 同点をもつて引分

対青学大二部戦 -114点差差もつて勝

となつております。

この様なめざましい成績を上げたのも顧問松本先生を初め、大学生の方々、又は諸先輩方の暖たかい御支援の賜ものとひとえに感謝し、今後一層の努力を続ける十二月のトーナメントの優勝目指し、部員一同ガンバツております。





天高く馬肥ゆるの秋を迎え、我が部の主人公たちに紹介をかねて今後の抱負なり、現在の状況などを語ってもらいました。

### 青渚号（中半血・十才・栗毛、セン）

小生もよわい四十を数え、不惑の年になりましたが、未だに、色々と悩んでおるような次才です。最近は更年期障害でしょうか、体の調子がよくありません。誠に皆様には申し訳なく思っております。八月の末には、月雪の親父さんも姿を消しました。悲しいことです。



そして、今では小生が最古参となりました。とにかくこれからも、今迄以上頑張っていきたいと思っております。現役の皆さんも、よく頑張っておられます。ただ欲を申せば、今少し、男くささを出していただきたいものです。小生も、男のはしくれですからな。そろそろ！今年の四月に入った、お坊ちゃん、お嬢ちゃん方も、ずい分うまくなられました。憎いことに、私

のりお腹に 時々拍車を入れますからな。ま、今後ともよろしくおねがいします。

青武号（6才・アングラ・アラブ種・鹿毛）

手前生国は北の国でございます。北海道は日高の産、青武というケチな野郎でございます、物心ついてから東海道を流れ京の都で働らしていやしたが、これも何かの御縁でございますよう、今から数うれば、かれこれ二年前上京し、青山の親分衆の客分となつていやす、兄い方も御存じかと思いやすが、手前の親父はニユーバラツケと申し生粋のアラブツ子でございます。：とこんを啖呵を切つても仕様がないですね。

僕は今では障碍から足を洗つて馬場に転向していますが昨年の九月迄はバリバリ飛んでいたんです、去年の関東学生自馬對抗戦で足と腰を痛めてしまつたのです、もつとも京都競馬場から移つてきたのは腰が弱かつたからなのですが、でも生来の負けん気と血統のよさが手伝つて自馬対から三ヶ月後のアバロン大会に馬場馬術で優勝して、早くも一年たちました。今年の東京大会にも優勝（婦人サンジヨルジュ）と三位（一般サンジヨジュ）に入賞し今では部内の人気も上がり、

御機嫌なんです。でも一寸シヨックなのは、つい最近装蹄の親父さんが、云つていたのを聞いたんですが僕の膿の発達はもう止つたんです。まだ若のにいやだなあ…、でも僕は負ける事はきらいなのです、試合でも喧嘩でも、おかげで両隣のク口君とデカ君には随分傷つけてしまつたけど。安心して下さい人様には極く大人しいんです。とに角ガンバリますからよろしく。

青藤号（重半血・10才・鹿毛）

俺らあドンだ。そのううまく云えねえだが、皆さん俺のこと、とつても可変がつて下さるだ、おらあそれがとつてもうれしいだ。そりゃあ、おらの面は少し間が抜けてるかも知れね、でも、おらあ、愛嬌があつていいと思つてるだ。ただ時々、鏡見て、さみしくなることもあるだが、でも、おらの背に乗つてる人間にも、おらとよく似たのがいるしな。まあ、お互い、あんまり気をもまねえことにしたいだ。話しは違うけれど、おら自由が好きだ、好きなときに寝て、食つて、そんな、気が向きゃあ、障害も飛ぶだ、あんまり高いのは飛べねえだが、俺ら、とにかく、したいことはするだ、泊りの人には悪いだが、時々、馬栓棒はずして散歩

に行くだ。そうするとみんな、あわてて飛びおきてくるだが、なんで、俺らを一人にしてくれねえのか、そんなに俺らのこと、心配かな。最後に、先輩の皆さんも、時々おらの面、さすつてくれる、おら待つてるだ。

雷神号（中半血（トロッター） 6才・朽栗毛）

冬の夜汽車で運ばれて、到いた所がこの馬房、居並らぶもさをはったとにらみ、男ならばと、居合抜き、打った太鼓の音しばし、狭き厩舎に鳴り響く、折りから吹雪く網島嵐、男の門出にや、チョンあーかっこういいぜ……」

かくして私は去年の暮に名乗りを上げました。私を皆さんはデカと呼んでくださいます。私もこの名前が気に入っております。小さな馬房に二時間程の練習の後を翌日まで、ここで過すのです。少しくいや大いに苦痛を感じますが、私は眠るのが好きですから、まだ耐えられます。皆さんお暇がありましたら、我々を広い場所に連れ出して下さい。

ところで、私は馬場も踏み又、障碍も飛びます、綱島での練習の時は高いのも落さず、飛ぶことが出来ませんが、いざ試合となると、体に似あわず気が小さいも

のですから、つい上がってしまったて、障碍は飛びます、落下してしまふのです。これからは気を付けますから皆様もよろしく御指導して下さい。ではこれで失礼します。

青潮号（中半血・五才・青鹿毛）

早いもので俺が青山学院馬術部の一員となつてから一年がすぎようとしている。我が部にはめずらしい黒鹿毛なのでみんなもてて、体がいくつあつてもたりなくらいだよ、まあ馬術部一の色男というところかな、「どうしてこんなにもてるんだろ」てなもんだ。

こんを俺にも色々悩みがあるんだ。オーは、美しさを誇つていた毛の黒さもだんだんはげてきてしまひ愛称の「ククロ」にふさわしくなくなつてしまつたことだ。これでは今に「ハゲ」などと呼ばれそうだよ。もう一つまだ体ができあがつてないことだ、だが若いんだから今に良くなるよ、心配するなつてことよ、試合にも数回出たが結果は良くないねえ。だが俺の責任じゃねえよ、ありや乗手が悪いんだよ。それに馬場があればつちじゃ障碍なんか飛べやしねえよ。とにかく俺りやあ若いんだ。今に青学馬術は野武士のククロがしよつて

立つてやる。青学馬術部俺でもつ。そいつあ豪気だね。  
てなもんだ。おそまつ。

青扇号（アンゴアラブ種・12才・栗毛）

あやしやねえ、そりや年はとつてますよそれに、体も小さいですよ、でもさ、あたしや、敗けてやいませんからね、金髪のやわらかい立て髪、丸まつちいお腹の線、これなんぞは、他の牝馬には見られませんよ。とまあ、こんなに若い気でおりますんですよ、先日モ保土ヶ谷での試合で、サンジヨル賞馬場を踏みまし

## 彼と私

二年 那波 広和

彼とは、昭和三十五年五月、関西学院大学より購入した月雪号の事である。尾花栗毛という参らしい毛色

てね。初めて、入賞したんでございますもの、もつとも、平木コーチがお乗りになつたんですが、これからは、部員の皆さんに乗っていただけなんですの、それにあたくし、よく暴れるんですがそれは、なんですか、体がくすぐつたいからですの、こめんあそばせ。以後、青武さんと私に馬場の方はおまかせ下さいね、それに雷神さんと青藤さんも馬場が出来ますし、部員の皆さんも、馬場をしつかりおやりあそばせ、では今後ともよろしく、こめんあそばせ。

に、真白な大流星、金色の立髪、堂々とした馬格をしていたが、寄せ来る歳には勝てず、ついに歩行困難となり、当馬術部に、多大な功績を残して、三十八年八月二十四日にこの世を去りました。

彼と私との最初の出合は、私が馬術部に入部した日である。あの真白な大流星と、金色の立髪が、私の目に最初に飛び込んで来た。「奇麗だな！」「イカス！」と思って、見とれていた瞬間、彼は急に耳を後にそらせたかと思うと、目の色が変わり、真白い（？）大きな

歯を向きたして飛びかかって来たのには、びつくりぎ  
ようてん 馬が蹴るといふ事は知っていた私でしたが、  
まさか、馬が、歯を  
向きたして噛みつく  
とは……

後ほど、先輩から

「咬癖があるから決  
して前から近よらな  
いように」と。注意  
を受け、合せて、彼  
の名が、月雪である  
事も知りました。そ  
れからしばらくの間  
彼には近よらなかつ  
たが、どうしても近  
ずかなければならな  
い事に成ってしまった  
のだ。私達新入生  
も席匹の係りを決め  
られる事に成り、

「絶対月雪の馬匹に



は成りませんように」と、心中深く（まったくその時  
は心中深くであった）思っていたところ、先輩から発  
表された馬匹表には、

なんと、「月雪―那波」  
と無情にも書いてあ  
ったのだ、どう思っ  
たところで決められ  
た事には、従わなく  
てはならないのが、  
クラブの掟。それか  
ら毎日というもの、  
「食うか、食われるか」  
否、噛みつくか、噛  
みつかれるか」「蹴る  
か、蹴られるか」  
という決死の思いで  
あった。

まず第一の難関は、  
朝彼を金網の馬房か  
ら、外に出す時に始  
まる、機嫌の良れ時

は、他の馬と同じように

「寝ハリ」を持っていけば、大人なしくしているが

、虫の居処が、悪い時なんかは（往々にして、虫の居処が悪かった。）大仕事、馬房の後に、ひっこんで目だけ私の方に向け「折角の睡眠の時間を、起しやがって」と云いたそうに、「ギョロリと動し、一步進もうものなら、あの白い歯を上下に開けて今にも飛びかからんばかり、しばらくの間は、ジ―」とにらめっこが続く、まさしく一対一の「静かな対決」である。

そこで寝ワラを、二、三本とって彼の口に持って行ってやり、彼の首を私の方に向けておいてから、彼が寝ワラを食っている隙に、寝ハリをかけて、この対決を終る。このように騙す手として、空の飼桶や草を使ったりしたものである。又、「ユキ、ユキ、来い」と彼に呼びかける言葉は、時として私自身を、勇気づける言葉に変化したものであった。

第二の難関は、手入れ最中の時である、寝ハリの綱が少しでも緩んでいたら、一刀のもとに「ガブリ」爪を掘る時も、少しでも油断したら、大きな足で、一馬力程の圧力をかけられる。いやはや、まったく氣を使つ事といったら。

このようにしばらくの間というもの、生命の危険にさらされて来たのである。

私の馬匹係の先輩の親切なおかげでどうやらこうやら一人前に手入れが出来るようになり、彼の攻撃にもかわす。コツ　を覚えた。

二、三ヶ月も過ぎると、彼の洗礼（私遠はこう呼んでいた）を、受ける新入生が続出した。この洗礼というのは彼の最大の欠点であり、又、魅力（？）ともなつてのる唆癖である。ある者は肩を、ある者は、腰を、そして胸をと、この洗礼を受けたものである。

彼が、「噛みつく」とのう事は分つていても、つい忘れてすぐ側を通つたり、もう慣れて、大丈夫たという自信過剰から来る新入生独特な気持で、彼の前に、飄然と立つたりした者達ばかりであった。ところが、不思議と私と、ごく少数の人達は、この洗礼を受けなかつた、（辛か不幸か？この時まで）

しかし彼は、私を忘れなかつた、ついに私は、彼の洗礼を、受けてしまったのだ、あの時の事は、生涯否、死んでも、忘れないであろう。

それは、ちょうど、十一月のアバロン大会の時であった。試合前に、入念に手入れをしてやろうと、彼の体

にブラシをかけてやっている時、やはり、私にも、自信過剰の気持があつたのであろう、まさかと思つて寝八りをゆるめておいたところ、急に自分の体が、宙に浮き、（この時は、全く、痛みを感じなかつた）「アツ」と思つた時には、馬房の前に、ほおり出されていった。

「折角、人が、奇麗にしてやろうと思つているのに、それを噛むとは」と彼を恨みに恨んだ。

彼を憎いと思つた事は、この時が鼻初で最後であつた。この傷のために、私は、翌日一日中、家で寝ていなければならぬ程の痛みを得た。

このような事は、彼のこの洗礼を受けた人達、皆んなが経験した事であらう、今でも、腰には、齒型の跡がついている。それは、まるで、牛の烙印のように。

それ以来、彼とも、冷い戦争が、続いた。

手入れも、ブッキラボーに成つた。

しかし先輩の話しを聞いたたり、白分で考えたりして、私なりに、彼を理解するように成つた。

その理解というのは、彼の唆癪である。彼は、好きこのんで、人を傷つけるわけでは無い、それは、彼の臆病さから来るもので、防御の意味で、人を牽倒するつ

もりが、つい、あのような事になつてしまふのである。その事は、彼が、彼の仲間達の中で、一番弱い事によつても、分る事である。むしろ、同情してやらなければならぬのだ。そして、今まで、自分が、彼にとつていた行為が、間違つてのた事に気がついた。

私が、彼を理解出来るようになつてからというもの、再び、彼との友情は、帰り咲いた。

彼の手入れが、良くなつたのも云うまでも無い。

こうして、彼との思い出が、苦しみながら、楽しみへと變つていった。毎日が楽しい日の連続であつた。

入部した年の十一月の部内対抗試合に於て、私は、彼のおかげで、無事全経路を、満点で通過し、栄えある技能賞を獲得し、カップと賞状とを、手に取る事が出来た。明けて、翠年の一月、先輩諸氏の見まもる初乗会に於ても彼と共に、技能賞の「タテ」を受け取る事が出来たのである。

しかしながら、最もの彼との思い出は、彼と二人きりで、寒さの中、馬事公苑から綱島まで帰つた時であつた。まだ道も良く分らない時であつた。

その時に、人間と、馬との心と心の触れ合いに接し

たような気がしたのであった。

私が馬事公苑を出たのが、三時半頃、彼の体を、かばつて、勿論、常歩である。多摩川を通過するあたりで「早く帰らなれと日が暮れるぞ」との言葉を残して、慶応の馬が三頭、速歩で、私を、追越して行く、太陽をみたら、西の空に消える寸前、時計の針は、四時半、あたりは、薄す暗く成つて来るし、寒くなつて来るし、このまま、無事に綱島まで、帰えられるのか、道に迷つたらどうしようか、困つた事に成つたと一人ぼつちのさびしさを、つくづく感じていた時、急に彼が、鼻を鳴らした。その声を聞いた瞬間、私は、我に帰つた。「そつだ、ひとりぼつちじゃない、彼が居る、ユキが一緒なんだ!」「さあ、元気を出して、帰えろうぜ、ユキ!」

中原街道を、行き来する車も、ライトをつけるのが、一台、二台と、増えて来る、もう真暗だ!ダンプカーが、物珍らしいのか、私達すれすれに、警笛を鳴らし、通り過ぎて行く、まったく、しゃくにさわつた。それでも彼は、驚かず、力強い歩調で、道を進んで行く、日吉に着く、やっと車の洪水地帯から解放されたと思つたら、馬場までが一苦労、日吉のガードをくぐ

つて左に曲り、さて分らなくなつてしまつた。

(なにせ、一回しか通つた事の無い私なので、それも昼間)不安でしかたがない。

右に曲る事だけは解つてはいるのだが、どの辺の道だったか、確しか、山の端に、ぶつかると思つて曲つた道が、山にぶつかつたまでは、良かったけど、行きどまり、時計の針は、六時を少しまわつていた。

「ユキ!ごめんよ、もうすぐだからな!」

「もうしばらくの、辛棒だからな!」  
「どうやら、こうやら、探していた道に入り、バス通り道を、左に曲つた。この次、右へ曲る道が、又々分らなくなつてしまつた。仕方が無いので、道行く人を止めて、恥をしのんで、「すいませんが、綱島の上町へ行く道は、どちらでしょうか?」

やつとの事で、馬場への一本道にたどりついた。

「さあ、もうすぐで着くぞ、仲間にも会えるぞ!」と私は彼に話しかけ、彼から降りて、道端の草を、手でとつて、彼にやつた。彼も、やや疲れたような、表情を顔に表わして草にかぶりついていた。

しばらくの聞、私は真暗闇で、彼と向き合つていた。何故か、私は無意識のうちに、彼の首すじを、なでて

いた。(今でも、馬愉送する度に、この時の状況が目  
に浮んで来る)この時程、私の気持が、清らかに成つ  
た単は成かった。…………

しかし私が彼の馬匹に成つてから二年目の夏、ついに  
彼は、寄せ来る歳にほ勝てず、歩行困難となり、この  
世を去つた。馬場を去る時、彼は、三度鼻を鳴した。  
それは、何にもしてやれなかつた私達を恨む意では決  
して無かつたと思う、「長い間、色々、お世話に成  
りました。ありがとう御座居ました」と、私達に送る  
最大の感謝の意では無いであろうかと私には思えたの  
であるが、……

こうして最後まで、立派であつた彼のおかげで、未熟  
な私は、色々な事を、学ぶ事が出来た。

彼は、私に何物にも変えがたい物を、残して行つてく  
れた。それは、心と心の触れ合いと云う事である。

そして、彼は永久に、私の心の中にこの思い出を残し  
て行く事であらう。

月雪よ 安らかに眠むれ

かまへの心は決して無にはしないぞ!

そして再びおまえに会うような事があつたら

もつと長く つき合う!

## 三年間強の間に学んだ事

英文科四年 渋谷 芳子

家中で一番“アツカイニクイ奴”の悪評を持ち、  
強情ばりで泣き虫で好き嫌いが激しく、平気な顔して、  
とんでもない事をしでかし、そのくせすく気にする、  
そんな私が、他のどんな世界よりももつと辛い馬術部  
に飛び込んでしまつたという事は、何といつても道を  
間違えたというより他はない。が、ともかくにも四  
年間、正確にいうと私は丁度三年、という年月を生き  
抜いて来たわけなのだ。自分として決して満足するよ  
うな結果だけが得られた訳ではない。或る友人に言わ  
せると、まるでつまらない人間になつちやつた。“そ  
うである。つまり、なんとなく普通の平凡な人間  
になり下つたというのだ。けれども私自身としては、  
人間に丸みが出来た等と、自ら慰めている。三年間、  
息つくひまもない暴風雨に会つては、いくら四角な石  
も丸くなる。やがてその嵐も一瞬にして、過ぎ去ろう  
という時、ホツとすると同時にやはり一抹の寂しさを

禁じ得ないのは当然のことかも……。

或る夏の日、たった一人、大志を抱いた少女（昔の事だから許して、）が馬車公苑を訪れ、「何という心臓な女の子」という印象をなみいる上級生に（後になつてそれこそは全く鬼のように恐しい人達という事を身にしみて感じなければならなくなった。）与えたといい。父に馬術部に入ったといった所、一言のもとにハネツケられ、以後、二年間というもの、父の方から（あまりの私の熱意に感心してかあきれてか、）折れてくれるまで毎朝ラケットもポールも持たずに「テニス」の練習に馬事公苑へ、網島へ移つてからは網島へ、重い重いバッグを下げて通つた。おかげで渚にふまれてケガをしても、階段から落ちたという、月雪に咬まれても自転車にぶつかったといふ通したりせねばならなかつた。余り朝早く飛び出して行くので、一体あの子は深夜喫茶にでも通っているんじゃないだろうか等と痛くもない腹をさぐられるような浮目にもあつた。今では楽しかつた事も良く思い出すが当時としては、とに角辛かつたようである。同級生に意地悪をされて馬房のすみで泣いた事も一度ではなかつた。上級生ともケンカした。何度馬から飛びおりて、にくらしい奴の

横つつらをヒツパタいて逃げてしまおうと思つた事だろ。

それでも部をつづける事が出来たのは、私の負ん気と、今でも私の誇りである青剣のおかげだった。とりわけ剣坊は辛いにつけ、楽しいにつけ、私の心の支えであつた。剣坊と私が、あの思い出の緑深い馬事公苑を訪ずれたのがほとんど同時であつた事、あんなに沢山いる馬の中で何故か剣坊を一番始めに見つけた事は、今考えても何か私にとつて、不思議なめぐりあわせのように思われる。とに角一目惚という奴に違いなかつた。毎日毎日乗る事より剣坊に会いに行く為に通つたという方が正確だったかも知れない。

こんな私だったから、剣坊が死んでしまつた時には、悲しいも寂しいもなく、まるでフヌケのようになつてしまつた。全世界、敵の真唯中に一人おいてゆかれた気がした。最後の最後まであいつが死ぬなんて信じる事が出来なかつた、信じたくなかつたのだ。死んでしまつてからもまだ信じられなかつた。私がいくといつものように窓から顔を出してむかえてくれるに違いないと思つていた。

私の日記より

その一（劍坊の死ぬ二、三日前）

劍坊、お前はケガをしちゃっているけど……

お前はもう駄目たといわれているけど……

お前はもっと生きていたい？

お前はいつも何を考えているの？

お前は本当に子供が好きなのね

ついこの間、すごく空がきれいな日

お前は窮屈な裏窓から首を出して

小ぢやな子供達が、お前の為に摘んで来た草を一生けん命食べていたね

その時、お前が一層好きになつて

一人で笑つてしまった私。

お前はとてもやさしいんだね

夕方小さい人達が帰つてしまつてからも

か前はずつと顔を出していたっけ

まるであの子達の幸せを祈つているかのように。

その時又、お前の心のきれいな事を知つてうれしくな

つた私。

お前に始めて会つた時

その日も空がきれいだった

夏の初めのキラキラする陽光の中で……

その時もお前は、草を食べていたっけ

か前は愉快な奴、だけど可哀想な奴

いつだったか私もお前も知り初めて間もない頃、私がお前を引っぱつて林の中を歩き回つた事を覚えてる？

木の葉を通つてユラユラもえる光の中で、私とお前は

どんなにさまよつた事だろう。

お前は夢中で私を何度も困らせたのに……

忘れてしまつたの？

けがをしてもお前はそんなに無理をするの？

人間のように……。

だからお前が愛されるのだけれど

だからお前が可哀想で仕方がないの、いつもそつと

てあげたいと思つていた。

いつも分つてあげたいと思つていた。

でも、お前は私よりずつと大人なのね。

お前と一緒にだと私は自分が急に強くなるように感じる

たつてお前の身体があんまり大きいんですもの。

その2、劍坊の死後、三ヶ月

苦しく悲しく寂しく、空しい毎日が続いた。満されな

い日々、私の心の底にあつた“負けるものか！”とい

う気持ちいつしかこんな精神的圧力に耐えられなくな



# お知らせ

緑鞍会名簿訂正・変更のお知らせ

山本 磐彦 (明45卒) 藤沢市辻堂浜見山七三三九に変更  
井上 恒春 (大15卒) (四〇八) 六三四〇 三共油化工

業棟に変更

内田 友正 (昭6卒) シェル石油三信ビル内に訂正

中越 鴻八 (同17卒) (五三五) 四三三三 に訂正

福島 保男 (同16卒) (二一一) 一一一一 "

池谷 三郎 (同19卒) (四八一) 二二二二 "

沈 廻浜 (同28卒) 練馬区春日町二ノ三三三〇

電話(九九二)三八四二に変更

東 雄三郎 (同31卒) (七八三) 一四二四に訂正

藤根 威 ( " ) (四九一) 〇六七七 "

村野 吉昌 (同32卒) (三九〇) 三二六九 "

市原昭十郎 (同31卒) 福岡県福岡市草がえ本町四丁目

城西団地一六三二に変更

庄野 光行 ( " ) 室町化精(株) (二四二) 二六二六

を追加

相馬 潔 (昭33卒) 福井市尾上上町三六に訂正  
佐藤 一貫 ( " ) 新宿区市ケ谷田町一ノ一四住宅公  
団市ケ谷田町アパート六〇一号室  
に変更

に変更

原田 浩臣 ( " ) (七一三) 〇〇四九に訂正

立村 昭三 (同34卒) (四五二) 五〇三七 "

遠藤 恭輝 (同35卒) (二七一) 三五六一 "

波多野定夫 ( " ) 渋谷区元広町二

(四八一) 八三七一に訂正

水島 道子 (同36卒) 大同シャープ航空貨物棟を除く

金子 璋男 (同37卒) 大田区新井宿一・一六四二に変更

溝田 正利 ( " ) (四五二) 四一七一に訂正

御結婚・お目出とうございます。

どうぞ末長くお幸せに...

木俣やす子様 (37年短卒) 四月挙式

原田 絢子様 (36年卒) 十月 "

渡辺 孝子様 (57年短卒) "

木田美恵子様 (33年卒) "

立付 昭三鎌 (34年年卒) "

村野 吉昌様 (32年卒) "



## 編集後記

秋の夜長、横に寝そべっている同僚を、目を細めて眺めながら、何かしら自然と顔の筋肉が弛んでまいります。急いで急いでと一部先輩方始め、現役の皆さんにも、再三の催足、いささかお心を乱された事と思れます。曲がりなりにも編集し終りました今、皆様の寄稿と協力を心から感謝すると共に、今までの無礼をお詫びいたします。

ただ、心残りは試合報告が完全に出れなかつた事と先輩からの寄稿が少なかつたことです。尚、このいななきも出来ますれば、年に二回定期的に発行いたしたいと思っております。

より一層の皆様の御協力を期待いたします。

## いななき 六号

昭和三十八年十月二十七日発行

発行所 東京都渋谷区緑岡二二

青山学院大学 馬術部

代表者 伊藤正昭

編集費任者 稲熊武臣

印刷所 東京都豊島区池袋二ノ五二五

共栄社 (971) 九一一七

青山学院御用

徽章、カップ

トロフィー、卒業記念品の

御注文は

TEL(401)2389

富士徽章製作所へ

青山学院正門前

稲毛屋の特徴

当店の靴は保存型付です

営業品目

乗馬用長靴

郵便保存型各種

靴×ギョ

創業50有余年

東京靴産業

稲毛屋

広山二郎

東京都渋谷区糠田2-6-3

TEL (402) 5929

コクフク



マークの高級馬術用品総合販売

岩崎商店

東京都文京区音羽町1-1-1

(都電護国寺電停前)

TEL大塚(941)3744

コクフク ミナヨシ